

令和 3 年度全国学力・学習状況調査の結果概要
～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

令和3年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年

- 小学校、義務教育学校前期課程、特別支援学校小学部の第6学年の児童
- 中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校、特別支援学校中学部の第3学年の生徒

(3) 調査の内容

①教科に関する調査

- ・小学校調査 国語及び算数
- ・中学校調査 国語及び数学

②生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査（児童生徒質問紙調査）
- ・学校に対する調査（学校質問紙調査）

(4) 調査の方式

悉皆調査

(5) 調査の実施日

令和3年 5月27日（木）

(6) 本市における調査実施学校数及び児童生徒数

小学校16校 812名 中学校 8校 787名 ※北進小中学校を除く市内小中学校

*学校質問紙調査の結果について

質問紙調査では、調査項目が変更となる場合も多いことから、次の4観点に沿って質問項目を抽出し、千歳市の状況を把握することにした。

- ① 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言の取組状況や課題を把握する。
- ② 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」の効果や改善に向けた課題を把握する。
- ③ 千歳市教育委員会が重要課題として位置付けている「小中連携・一貫教育」の取組の状況や取組の充実に向けた課題を把握する。
- ④ 児童生徒と学校の意識の違いを把握する。

2 教科に関する調査結果

(北海道教育委員会の分類方法による9段階)

相当高い	・・・	7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	・・・	-1ポイント以下-3ポイント未満
高い	・・・	5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	・・・	-3ポイント以下-5ポイント未満
やや高い	・・・	3ポイント以上5ポイント未満	低い	・・・	-5ポイント以下-7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	・・・	1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	・・・	-7ポイント以下
同様	・・・	±1ポイント			

(1) 小学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
 全道：道内の全公立小学校 全国：国内の全公立小学校

小学校教科全体		国語	算数
平均正答数	千歳市	8.7 問/14 問	10.7 問/16 問
	全 道	8.9 問/14 問	10.8 問/16 問
	全 国	9.1 問/14 問	11.2 問/16 問
平均正答率	千歳市	62%(62.4%)	67%(66.6%)
	全 道	63%(63.2%)	67%(67.5%)
	全 国	65%(64.7%)	70%(70.2%)
全道との比較		同様	同様
全国との比較		ほぼ同様(下位)	やや低い

平成 31 年度の調査から、「主として『知識』に関する問題」と「主として『活用』に関する問題」の区分を見直し、知識と活用力を一体的に調査する問題への変更が行われたが、内容的には従前の「主として『活用』に関する問題」である B 問題に極めて近いことから、平成 30 年度以前の領域別の分析については、過去の B 問題の結果を用いて比較・検討することにした。

令和 2 年度は、新型コロナウイルス感染症に係る学校教育への影響等を考慮して本調査が実施されなかったことから、本年度を「今回」、平成 31 年度を「前回」、平成 30 年度を「前々回」としておさえ、経年変化を捉えることにした。

調査における問題の分類において、今回、小学校各教科の「学習指導要領の領域」や「評価の観点」の一部変更があったが、新しい名称の場合は過去の同系統のデータを参考にする事とした。なお、従前と同じ名称の場合は過去のデータを関連づけて比較・検討しているが、領域間で移行した学習内容もあり、領域名が同じであっても同一の内容ではないことを付け加えておく。

国語については、全国を 2.3 ポイント下回り、全国と比較して「同様」から「ほぼ同様(下位)」の段階となった。

算数については、全国を 3.6 ポイント下回り、全国と比較して前回と同じく「やや低い」の段階となった。

国語については、前回、全国との差を 0.4 ポイントに縮めたが、今回は、2.3 ポイントに差が広がった。

領域別では、「話すこと・聞くこと」が前回は上回り、全国との差を縮めた。「書くこと」「読むこと」は前回は下回り、全国との差が広がった。「言葉の特徴や使い方に関する事項」は全国をやや下回った。

算数については、前回、全国との差を 3.2 ポイントに縮めたが、今回は、3.6 ポイントに差が広がった。

領域別では、「数と計算」「図形」が前回は下回り、全国との差が広がった。「測定」「変化と関係」「データの活用」は全国をやや下回った。

(2) 中学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
 全道：道内の全公立中学校 全国：国内の全公立中学校

中学校教科全体		国語	数学
平均正答数	千歳市	8.7 問/14 問	8.6 問/16 問
	全 道	9.0 問/14 問	8.9 問/16 問
	全 国	9.0 問/14 問	9.1 問/16 問
平均正答率	千歳市	62%(61.9%)	54%(53.7%)
	全 道	65%(64.5%)	56%(55.9%)
	全 国	64.6%	57.2%
全道との比較		ほぼ同様（下位）	ほぼ同様（下位）
全国との比較		ほぼ同様（下位）	やや低い

国語については、全国を 2.7 ポイント下回り、全国と比較し「低い」から「ほぼ同様（下位）」の段階となった。

数学については、全国を 3.5 ポイント下回り、全国と比較し「低い」から「やや低い」の段階となった。

国語については、前回、全国との差が 5 ポイントに開いたが、今回は 2.7 ポイントに縮めた。領域別では、「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が前回は上回り、上昇傾向にある。今回、「話すこと・聞くこと」は上昇したが、経年をみると上下を繰り返している。「読むこと」は、連続して前回は下回り、低下傾向にある。

数学については、前回、全国との差が 5.4 ポイントに開いたが、今回は 3.5 ポイントに縮めた。

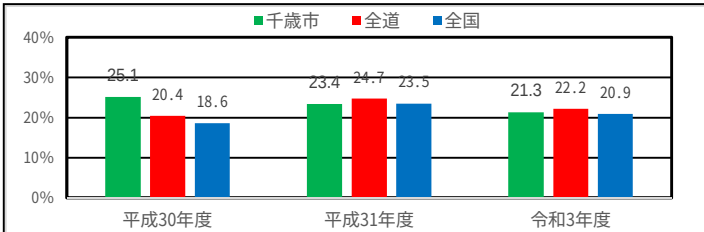
領域別では、「数と式」「関数」「資料の活用」が前回は上回り、全国との差を縮めた。特に、前回、激しく落ち込んだ「関数」は 4 年前とほぼ同様の状況に回復し、「資料の活用」は過去 4 年間で最高の成績となった。「数と式」は前回は上回り、「図形」は前回は下回ったが、経年でみるといずれも上下を繰り返しながら横ばい傾向となっている。

(3) 小学校国語

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

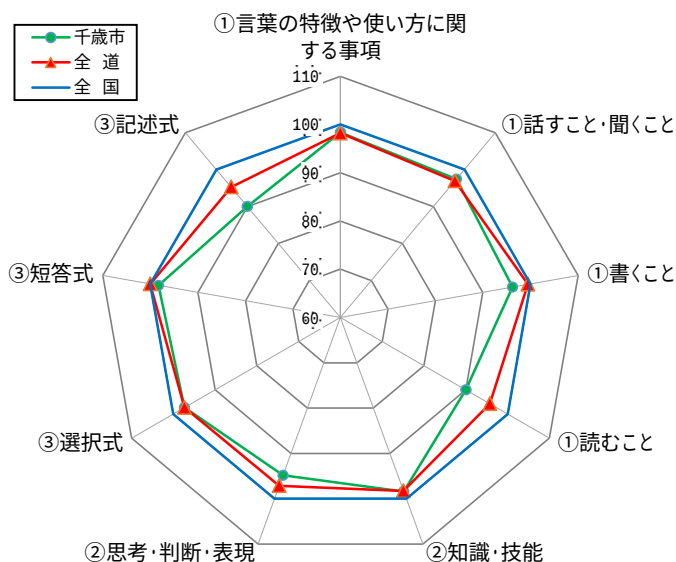
	平成29年度	平成30年度	平成31年度	令和3年度
千歳市	55.0 95.7	48.8 89.2	63.4 99.4	62.4 96.4
全 道	56.3 97.9	52.7 96.3	62.8 98.4	63.2 97.4
全 国	57.5 100	54.7 100	63.8 100	64.7 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



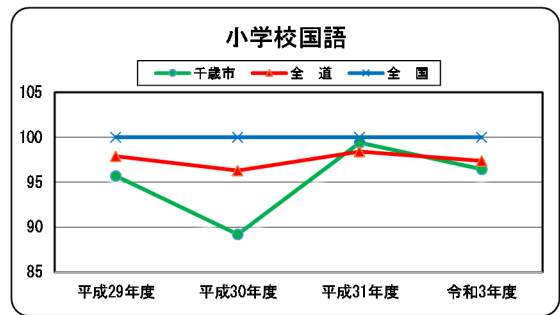
正答数の少ない層の割合は、全国と同水準となり下位層の底上げが図られている状況が見られる。正答数の多い層の割合は、全国よりやや低い状況となっている。

【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】

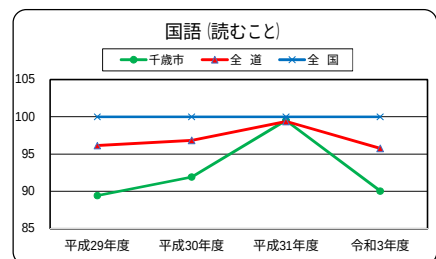
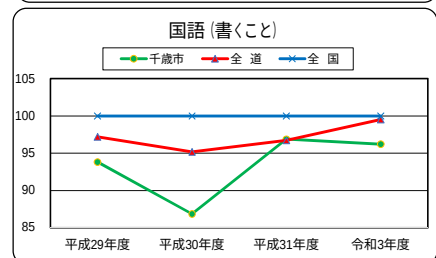
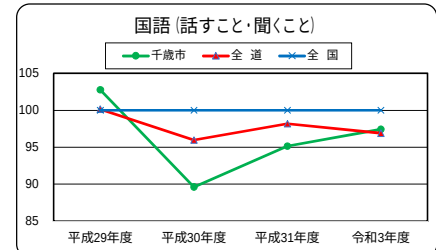
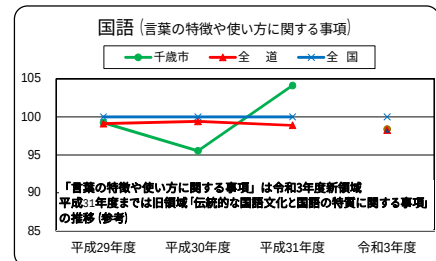
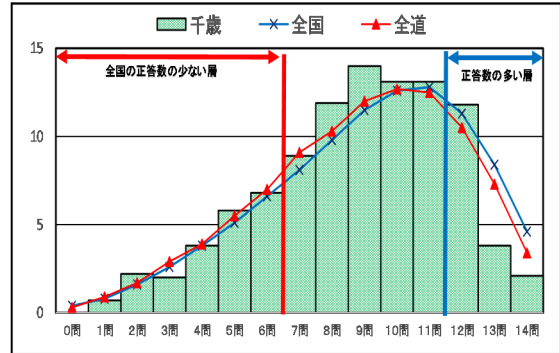


「話すこと・聞くこと」は前回の成績を上回ったが、「書くこと」「読むこと」は前回を下回った。「言葉の特徴や使いに関する事項」は、全国をやや下回った。国語全体の平均正答率は、全国とほぼ同様（下位）となった。

「話すこと・聞くこと」は、前々回より着実に伸びており、全国平均に近づきつつある。（全国を 100 とした指数で前々回 89.6、前回 95.1、今回 97.4）「読むこと」については、内容の中心となる事柄の把握や必要な情報を見つけることに課題があり、前回を下回った。「書くこと」については、目的に応じて文章全体の構成や展開を考えることに課題があり、前回をやや下回った。「言葉の特徴や使いに関する事項」は、全国平均を下回ったが、漢字や主述関係など、全国の正答率を上回った問題も複数あり、学校、家庭での学習の成果が発揮された。無答率が 14 問全てに渡って全国平均を下回っており、日頃の指導で培われた粘り強さが発揮された。条件に従い、必要な言葉を使って文章を書くことが求められる「記述式問題」の正答率が低く、今後も課題である。



【正 答 数 分 布】

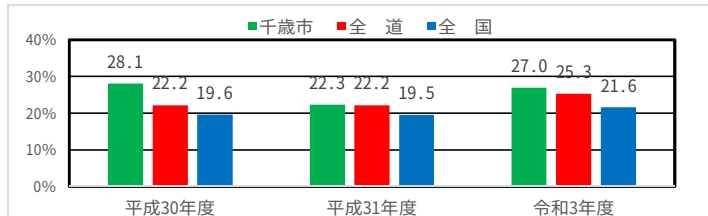


(4) 小学校算数

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

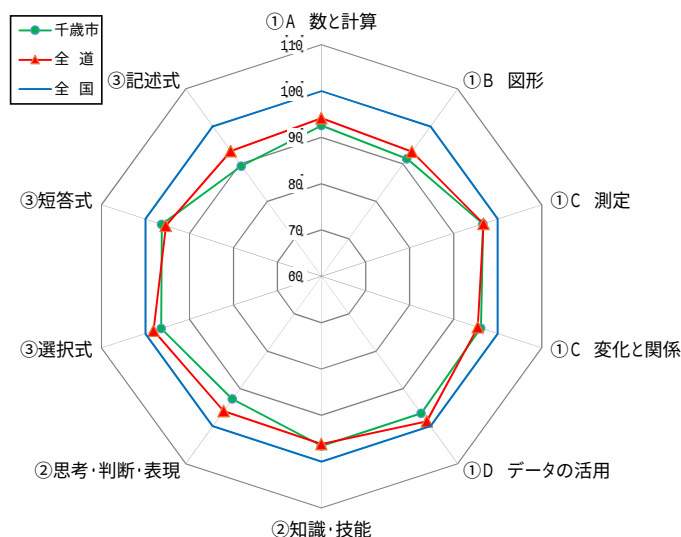
	平成29年度	平成30年度	平成31年度	令和3年度
千歳市	43.6 95	44 85.4	63.4 95.2	66.6 94.9
全道	43.5 94.8	48.7 94.6	64.5 96.8	67.5 95.4
全国	45.9 100	51.5 100	66.6 100	70.2 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



正答数の少ない層の割合は、全国より5.4ポイント高い状況で、前回よりも差が開いた。正答数の多い層の割合は、全国より低い状況となっている

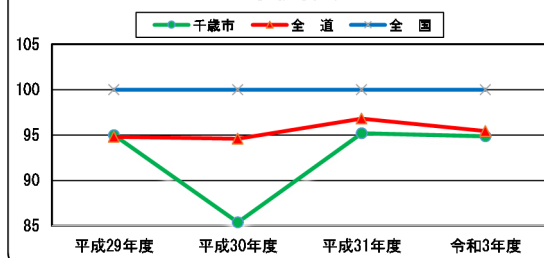
【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



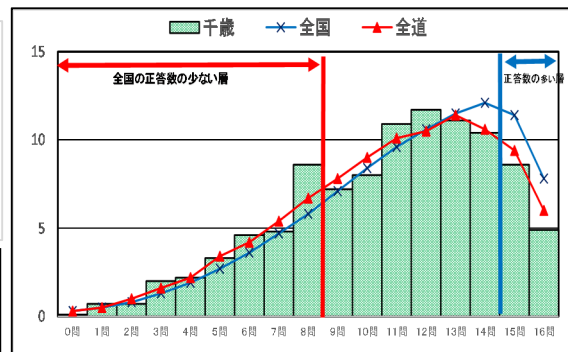
「数と計算」「図形」は前回の成績を下回った。「測定」「変化と関係」「データの活用」は全国平均を下回った。算数全体の平均正答率は全国より「やや低い」となり、横ばいの状況となった

「数と計算」では、「短答式問題」と比較して「記述式問題」の正答率が低く、前回は下回った。「図形」は、計算を伴う面積の内容が旧領域「量と測定」から移行され、今回においては、直角三角形の求積問題、二等辺三角形を組み合わせた平行四辺形の求積問題の正答率が低く、領域全体の低下に影響した。「測定」「変化と関係」「データの活用」においては、全国をやや下回る結果となったが、「データの活用」では、データを分類、整理する問題の正答率が全国を上回るなど、学習の成果が発揮された。「記述式問題」では、必要な数値を選択したり、図形の構成を捉えたりする思考力、判断力と答えの求め方や理由を説明する表現力が求められており、今後も課題である。

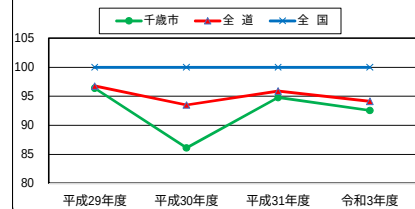
小学校算数



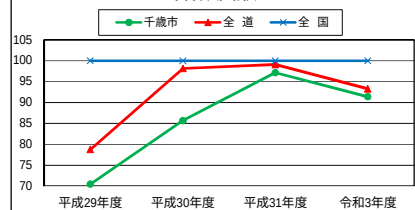
【正答数分布】



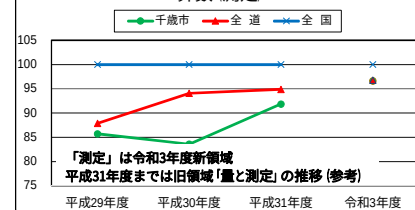
算数(数と計算)



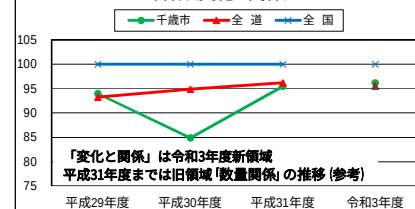
算数(図形)



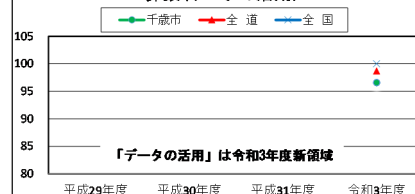
算数(測定)



算数(変化と関係)



算数(データの活用)

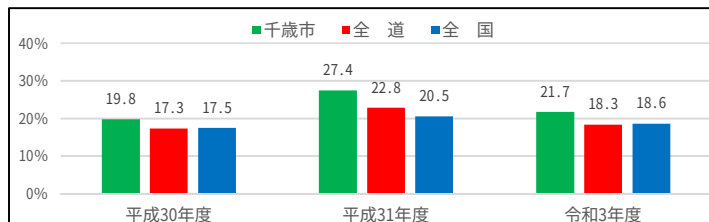


(5) 中学校国語

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

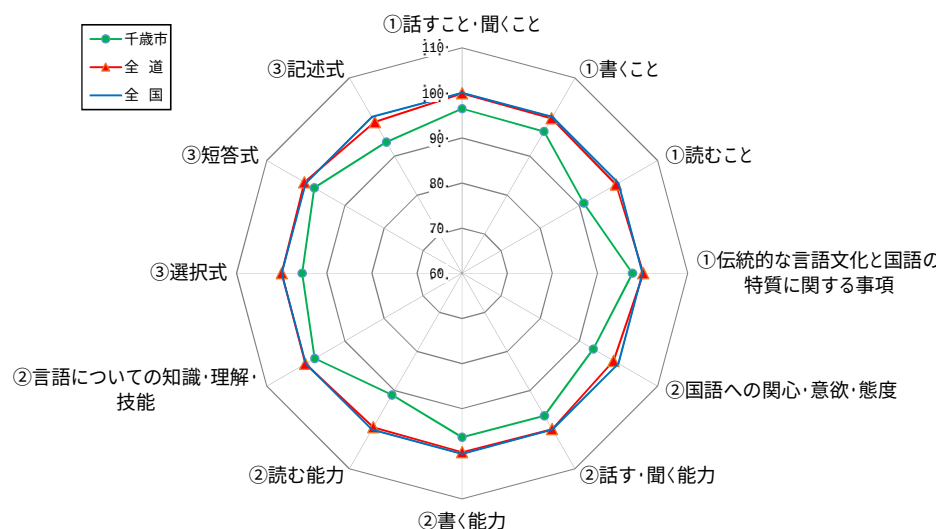
	平成29年度	平成30年度	平成31年度	令和3年度
千歳市	69.5 96.3	58.9 96.2	67.8 93.1	61.9 95.8
全 道	71.7 99.3	61.2 100	72.1 99	64.5 100.6
全 国	72.2 100	61.2 100	72.8 100	64.6 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合】



正答数の少ない層の割合は、全国より3.1 ポイント低い状況で、前回よりも差が縮まった。正答数の多い層の割合は、全国よりやや低い状況となっている。

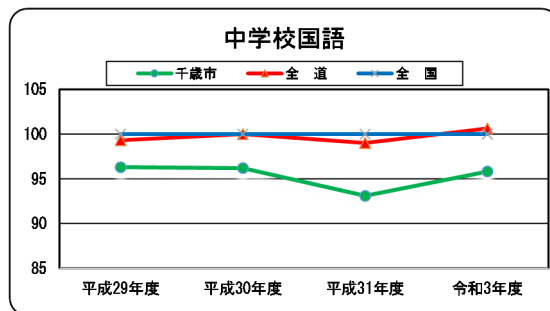
【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



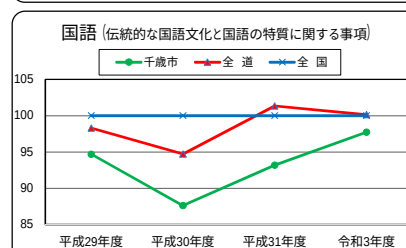
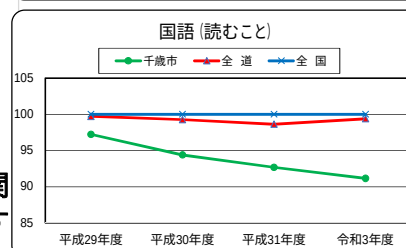
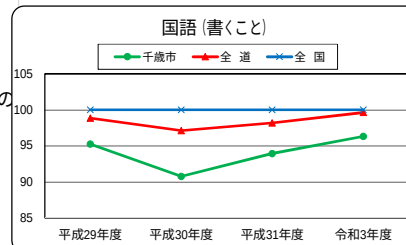
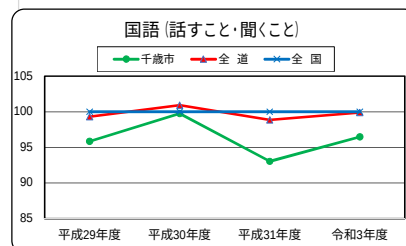
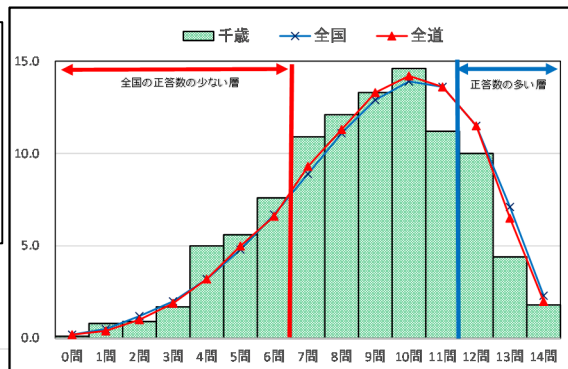
全国との差が縮まり、全国と「ほぼ同様（下位）」という状況となった。領域別では、「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が上昇傾向にあり、「読むこと」は低下傾向にある。「話すこと・聞くこと」は、上下を繰り返している。

依頼文を書く問題の正答率が全国を超えるなど、「書くこと」は順調に伸びて全国平均に近づいた。漢字や敬語に関する問題の正答率が全国とほぼ同様になるなど、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」も伸びて全国平均に近づいた。「言語についての知識・理解・技能」が全国を 100 とした指数で前回 87.3、前回 93.2、今回 97.7 と伸びていることから、日頃の学習の積み重ねによって両領域が向上したものとする。

「話すこと・聞くこと」については、話し合いでの司会の役割や参加者の発言の意図を捉える問題の正答率が全国とほぼ同様となり、領域全体の成績を引き上げた。一方で、文章の内容を捉え、自分の考えを書くことが求められる「記述式問題」などの正答率が低く、「読むこと」領域は低下傾向が続いている。



【正 答 数 分 布】

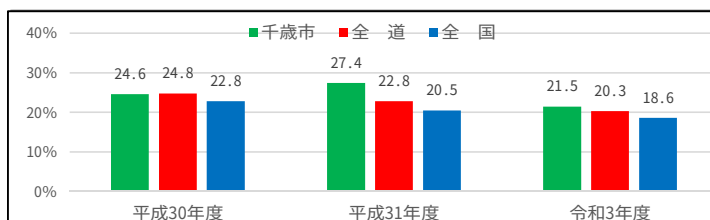


(6) 中学校数学

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

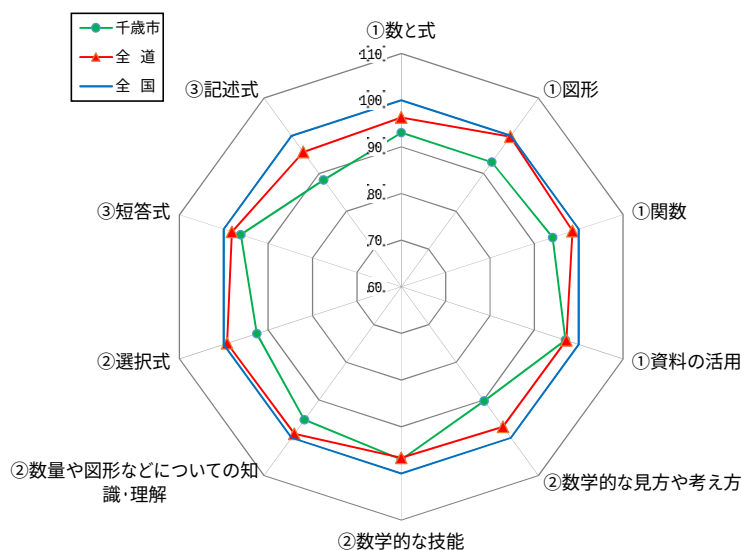
	平成29年度	平成30年度	平成31年度	令和3年度
千歳市	45.1 93.8	45 95.9	53.4 89.3	53.7 93.9
全 道	46.9 97.5	45.8 97.7	58.1 97.2	55.9 97.9
全 国	48.1 100	46.9 100	59.8 100	57.2 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合】



正答数の少ない層の割合は、全国より2.9ポイント低い状況で前回よりも差が縮まった。正答数の多い層の割合は、全国よりやや低い状況となっている。

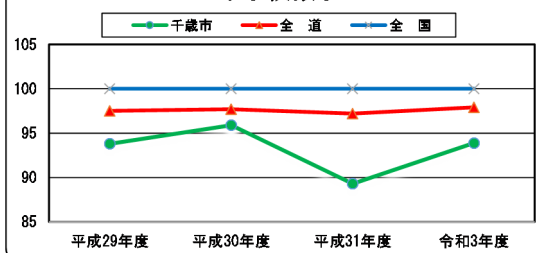
【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



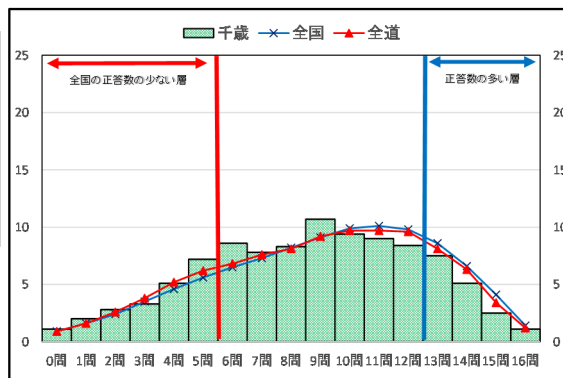
全国との差が縮まり、全国より「やや低い」状況になった。領域別では、「図形」が前回は下回ったが、他領域は前回は上回った。「関数」は4年前とほぼ同様の状況に回復し、「資料の活用」は過去4年間で最高の成績となった。

「資料の活用」では、代表値に関する内容の定着が課題となっていたが、今回は、代表値の一つである中央値を求める問題の正答率が全国を超え、領域として全国との差を大きく縮めた。「関数」は、前回は全国比で14.4ポイント上回り、4年前の成績とほぼ同様となった。「数と式」は、前回は上回ったものの、数量関係を一元一次方程式に表す問題などの正答率が低く、領域としては横ばい状況となっている。「図形」については、扇形の円弧と面積、平行四辺形の条件に関する問題などの正答率が低く、横ばい状況が続いている。「記述式問題」は、全国を100とした指数で前回は4.2ポイント上回り、今回88.3となった。「記述式問題」は、「数と式」領域で1問増え、5問となり全体に占める割合も高まった。どの問題も特徴、理由、方法について数学的な説明が求められており、論理的に考える力や数学的に表現する力の育成が課題である。

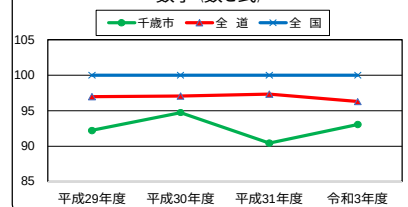
中学校数学



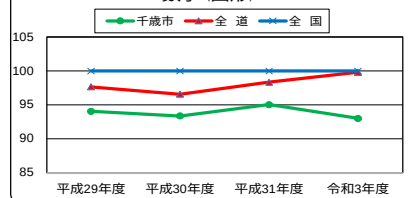
【正 答 数 分 布】



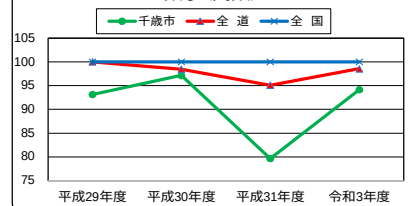
数学(数と式)



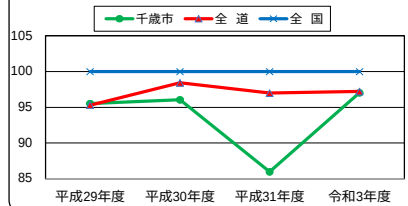
数学(図形)



数学(関数)



数学(資料の活用)

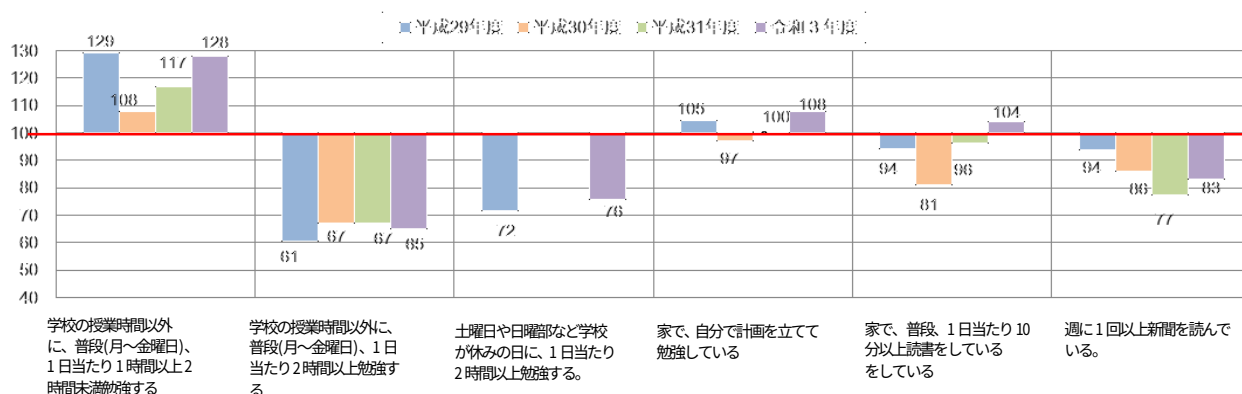
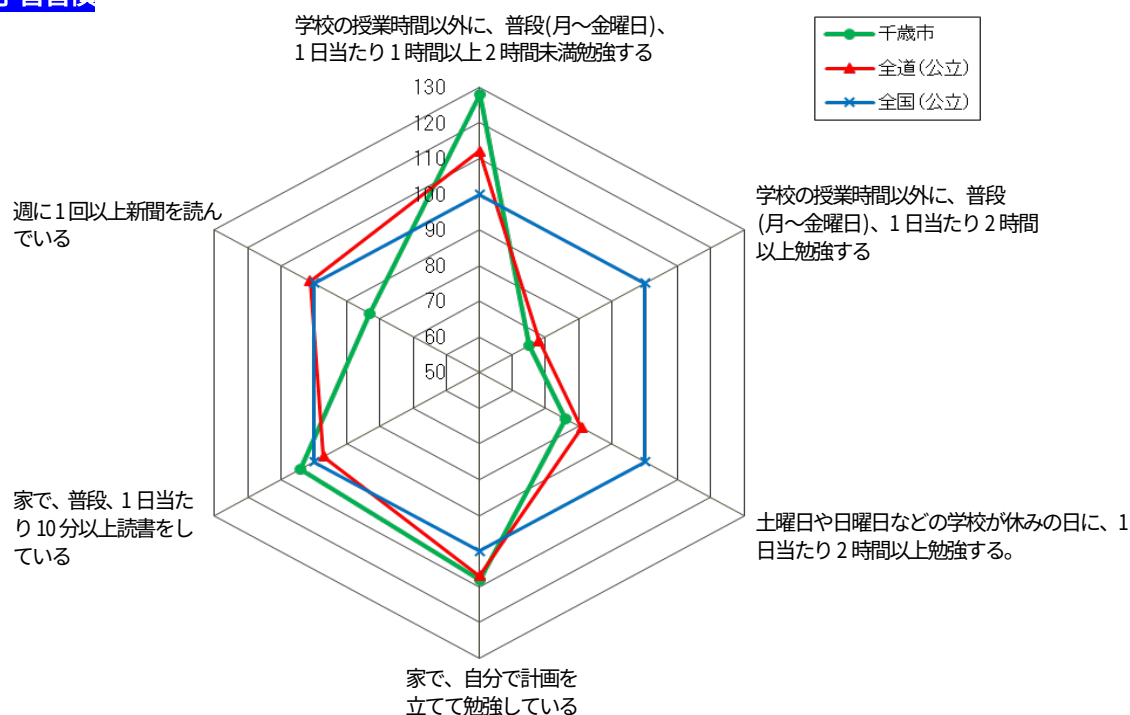


3 児童生徒質問紙の結果

令和3年度の調査では、児童・生徒質問紙の質問項目が多数変更されている。学習習慣に関する調査については、「学校図書館・地域図書館の利用」の質問が削除されたことから、この質問項目に替えて、新たに「土曜日や日曜日の勉強時間」の1項目を取り上げることとした。自己有用感・規範意識に関する調査については、「先生は、間違えたところや理解していないところを、分かるまで教えてくれる」「学校のきまりを守っている」の2つの質問が削除されたことから、この2つの質問に替えて、新たに「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」と、他者理解の面から「人が困っているときは進んで助けている」の2項目を取り上げることとした。

今回は、中学校の「英語」に関する質問が大幅に削除されたため、「数学」に関して、以前取り上げていた「問題の解き方を諦めずに考える」「学習したことを普段の生活で活用」の2項目を取り上げることとし、本年度の教科関係については、小学校は「国語」と「算数」、中学校は「国語」と「数学・英語」とする。

(1) 小学校学習習慣

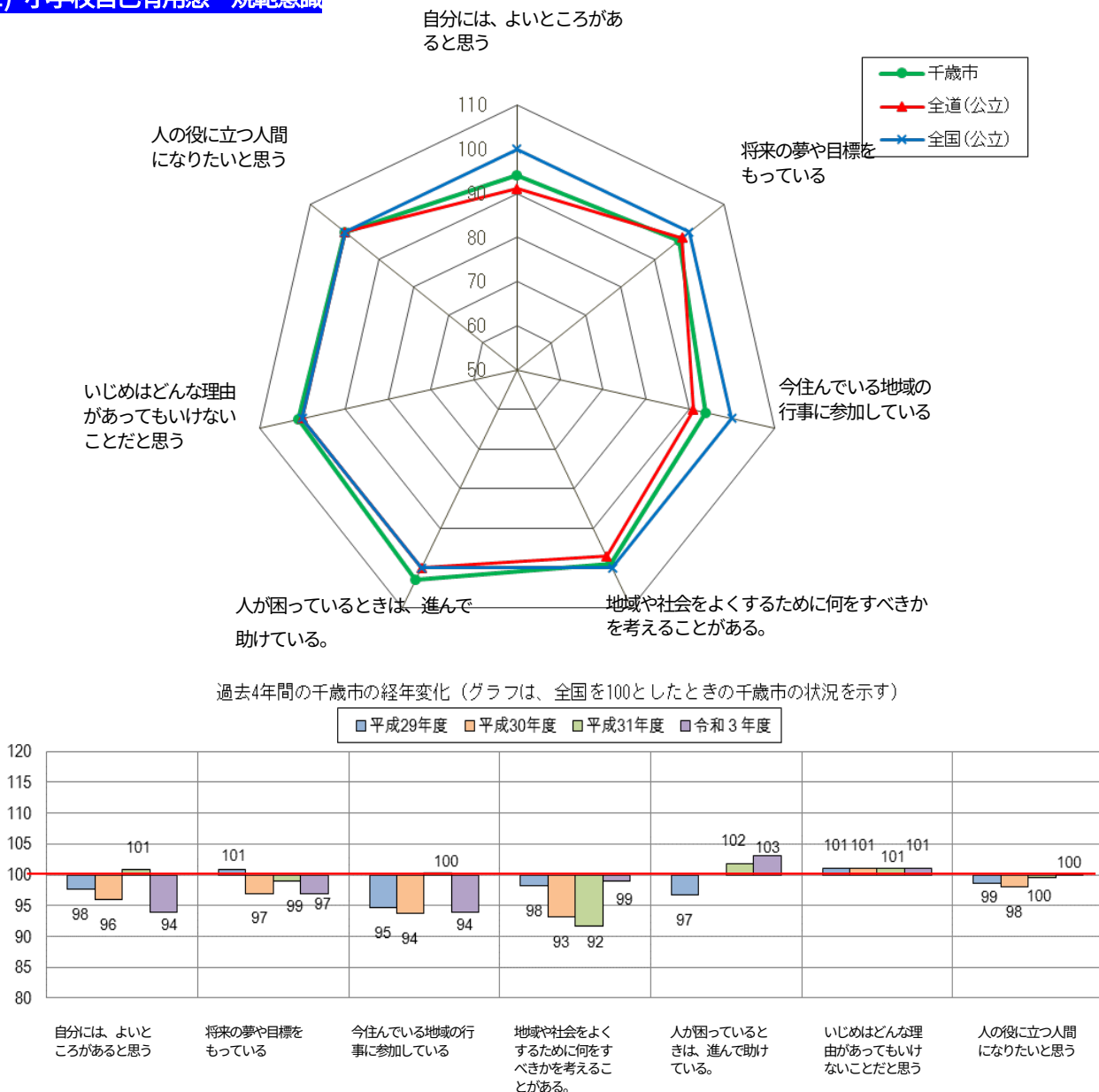


普段の学習時間に比べ、土日の学習時間が少ない状況が見られる

本年度の調査においても、「普段、1時間以上2時間未満勉強する」児童が全国を大きく上回っており、各学校が取り組んできた「学年×10分+10分の家庭学習」が定着している状況が見られる。1週間の総学習時間を増やすことが千歳市の課題であることから、今後も「学年×10分+10分の家庭学習」の基準を超えて学習する児童を増やすとともに、休日の学習時間を確保する取組を全市的に展開していくことが大切である。

「読書」については、「家で10分以上読書をする」児童の割合は全国を上回り改善しているが、「新聞を読む習慣」については全国よりも相当低いままとなっている。このため今後も、図書・新聞を読む時間や勉強時間の変化と教科に関する調査結果について、関係を捉えていくこととする。

(2) 小学校自己有用感・規範意識



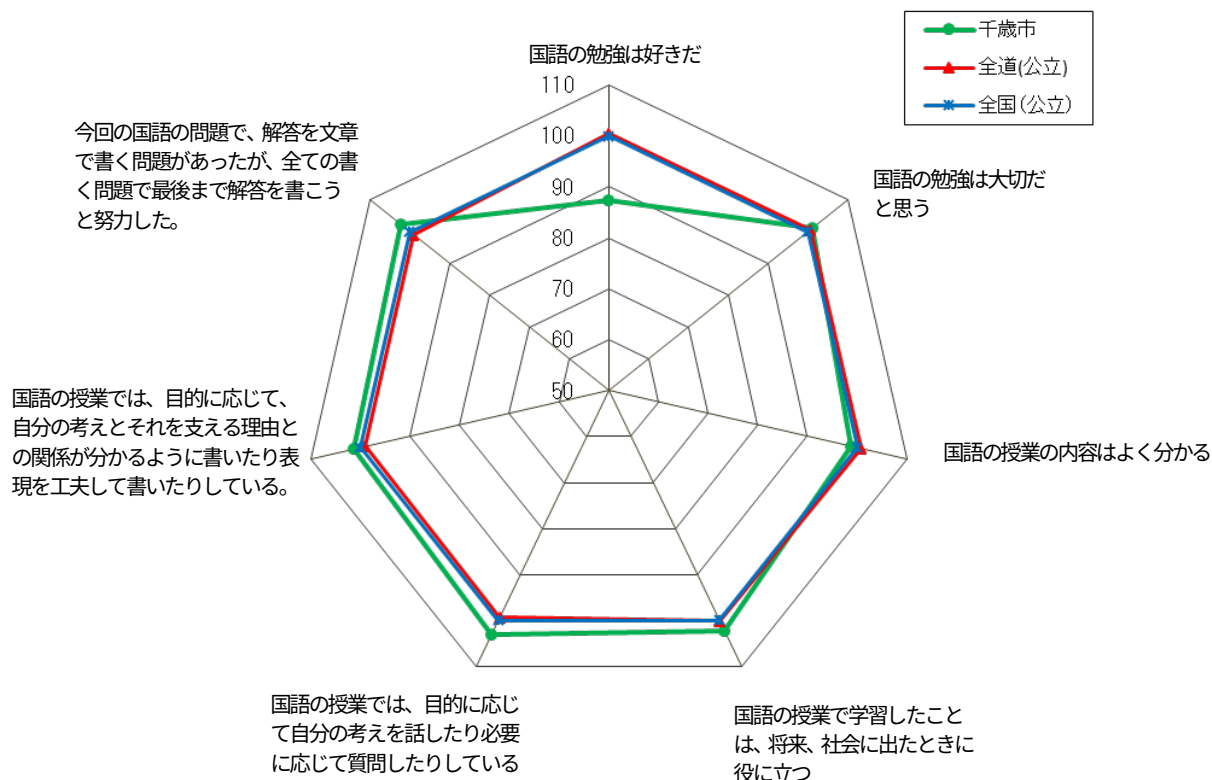
自己有用感・地域との関わりは低下しているが、規範意識には高まりがみられる

自己有用感については、「自分にはよいところがある」「将来の夢や目標を持っている」と回答した児童の割合は、前回よりも低下し全国を下回っている。地域との関わりについては、地域行事に参加している児童の割合は前回よりも低下し全国を下回っている。「地域社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」については、改善傾向となっている。全体的に、周囲とのかかわりの低下がみられる社会状況に影響を受けた結果となっており、実態に配慮した取組が求められている。

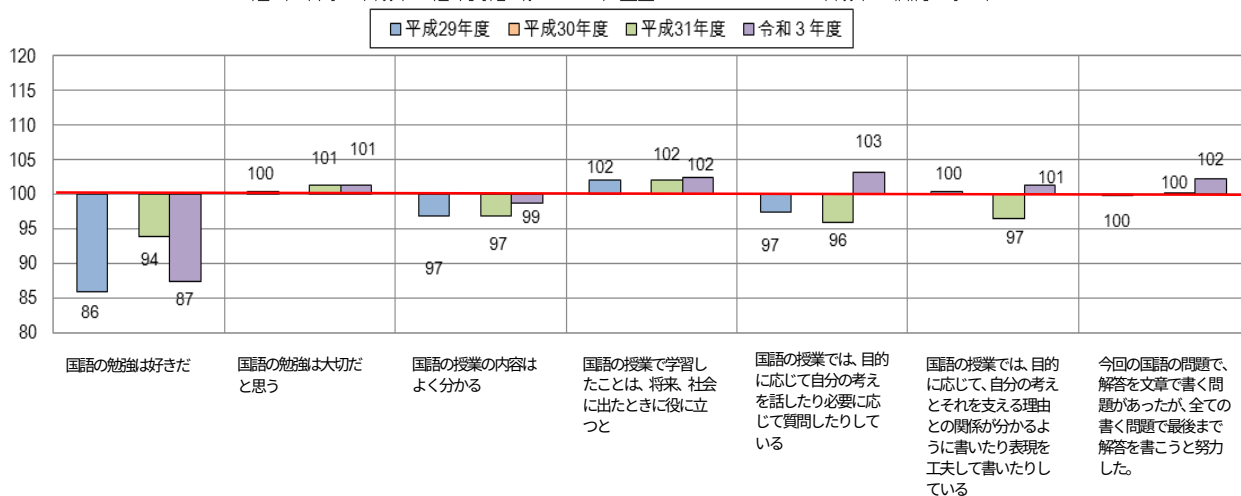
他者理解については、「人が困っているときは、進んで助けている」児童の割合が向上し、全国を上回っている。また、各学校が力を入れている「いじめ根絶」の取組により、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」と回答した児童が全国と同様のレベルを持続している。「人の役に立つ人間になりたいと思う」についても全国とほぼ同様となっている。

今後もハイパーQI検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、学級満足度を高める学級経営を推進し、規範意識や自己有用感を高め、思いやりの心を育てる取組を展開していくことが大切である。

(3) 小学校国語



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



「国語の勉強が好きだ」は低い状況が続き、記述問題への解答意欲が高まっている

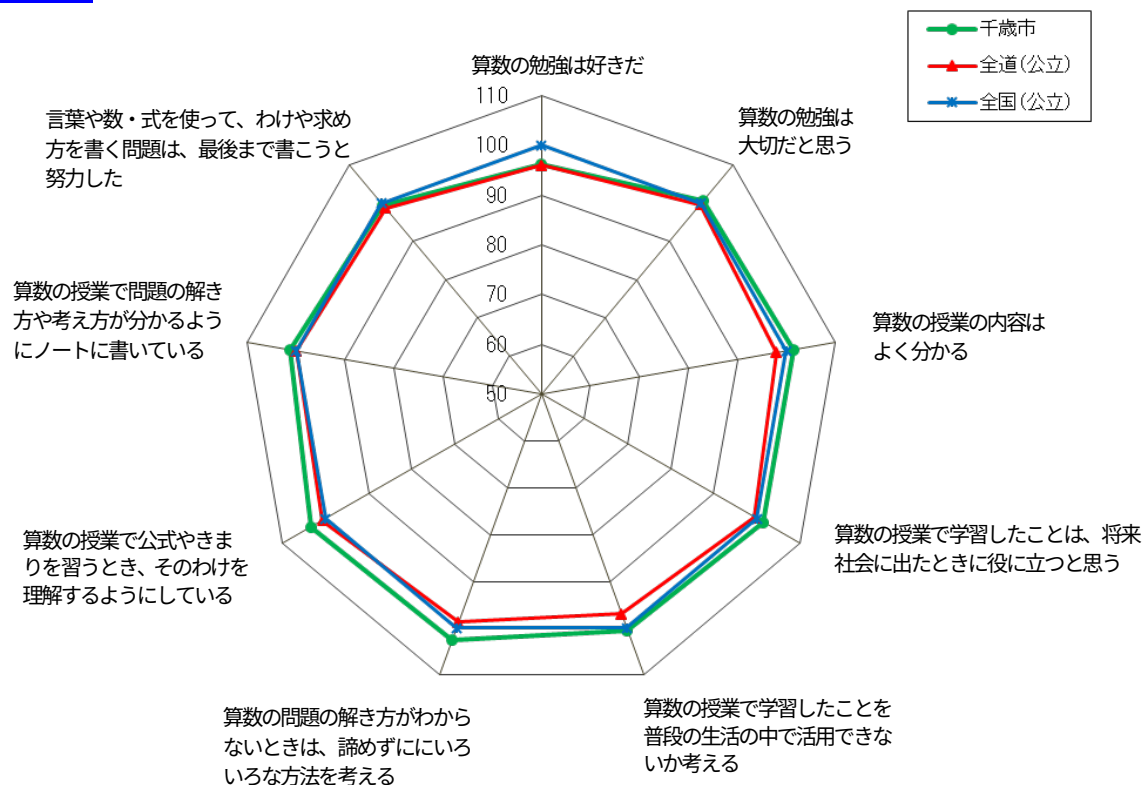
国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強は大切だ」「国語の授業の内容はよく分かる」「将来役に立つ」と回答した児童の割合が全国とほぼ同様となっている。一方、「国語の勉強は好きだ」は前回を下回り、全国よりもかなり低く、大きな課題となっている。

国語の学び方については、「目的に応じて自分の考えを話したり必要に応じて質問したりしている」「自分の考えとそれを支える理由が分かるように書いたり表現を工夫してかいたりしている」と回答した児童の割合は全国を上回っている。

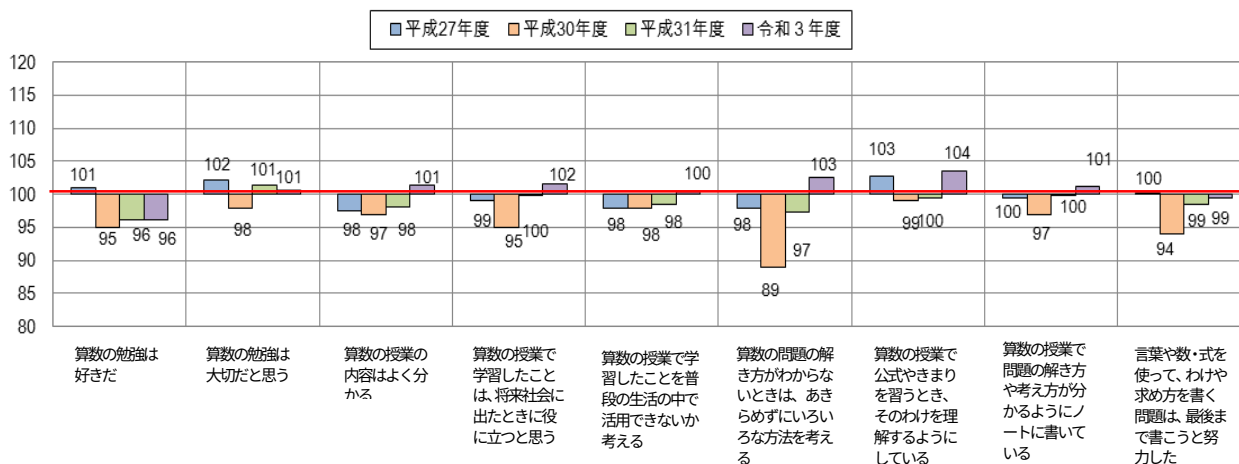
「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童の割合は、全国を上回っており、各学校で行っている、記述問題の回答率を高める取組の成果が表れている。

各学校において、児童の実態を分析し、デジタル教科書や学校図書館の効果的な活用と併せて、国語科での言語活動の充実に取り組み、児童の関心・意欲・態度を高めていく必要がある。

(4) 小学校算数



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



「算数の勉強が好きだ」はやや低い状況が続いている。ほぼ全ての項目で前回は上回っている

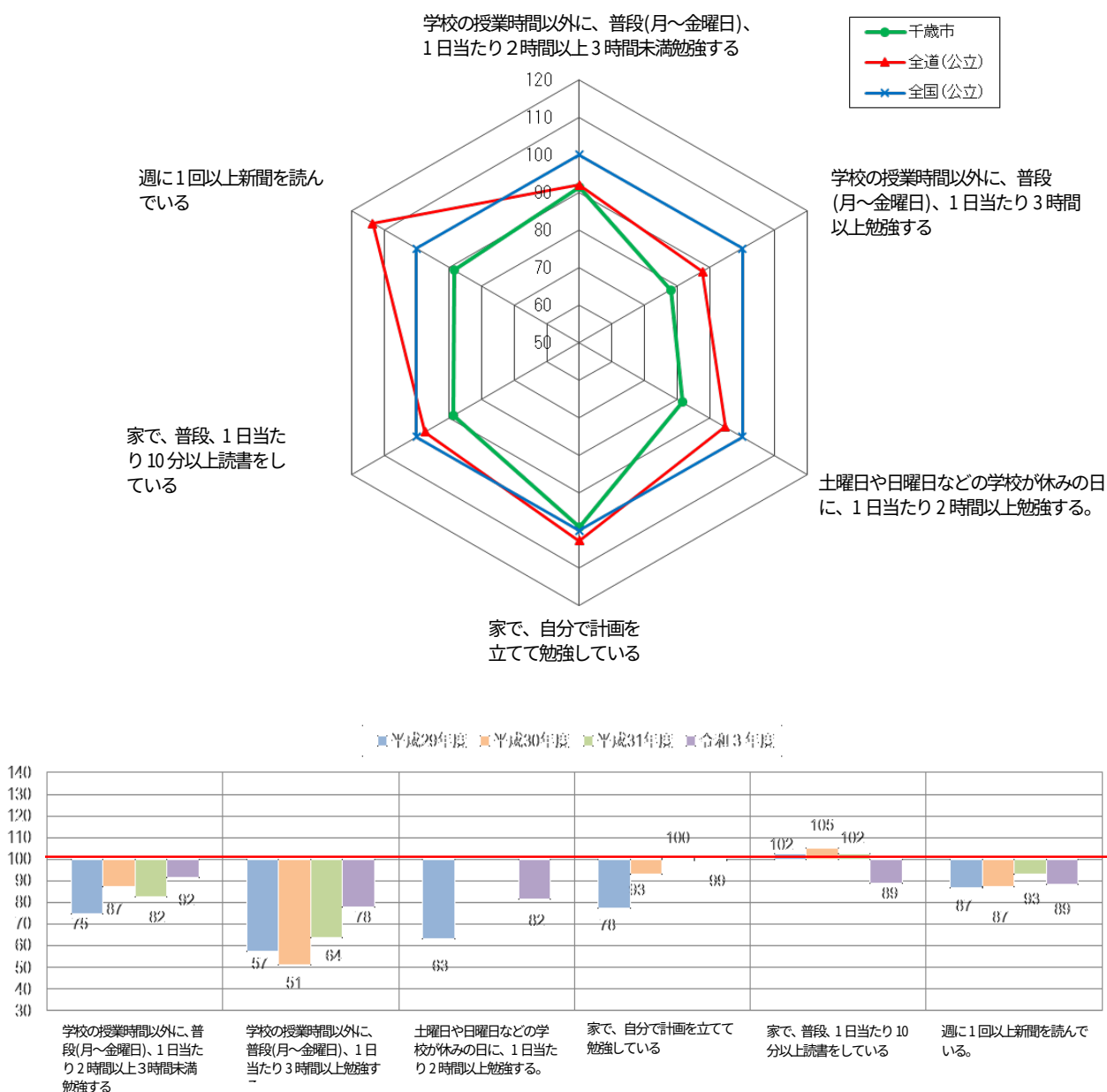
算数に関する関心・意欲・態度に関しては、「算数の勉強が好き」と回答した児童の割合は、前回同様全国を下回っているが、「算数の勉強は大切」「授業の内容はよく分かる」「算数の授業で学習したことは将来役に立つ」と回答した児童の割合が全国を上回っており、算数への有用性を感じる児童が増えている。

算数の学び方については、「算数の授業で学習したことを生活の中で活用できないか考える」「解き方が分からないときは、あきらめずに考える」「公式やきまりを習うときそのわけを理解するようにしている」「問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」と回答した児童が全国を上回っており、各学校の主体的な学びに対する取組の成果が見られる。

「言葉や数・式を使ってわけや求め方を書く問題は、最後まで書こうと努力した」と回答した児童の割合は、向上傾向が見られ、全国とはほぼ同様となっている。

今後も、学習支援員を活用した習熟度別少人数指導のよさを生かし、主体的に問題の解決に取り組む授業を工夫し、算数に対する関心・意欲・態度を一層高め、「算数が好き」な児童を育てていくことが大切である。

(5) 中学校学習習慣

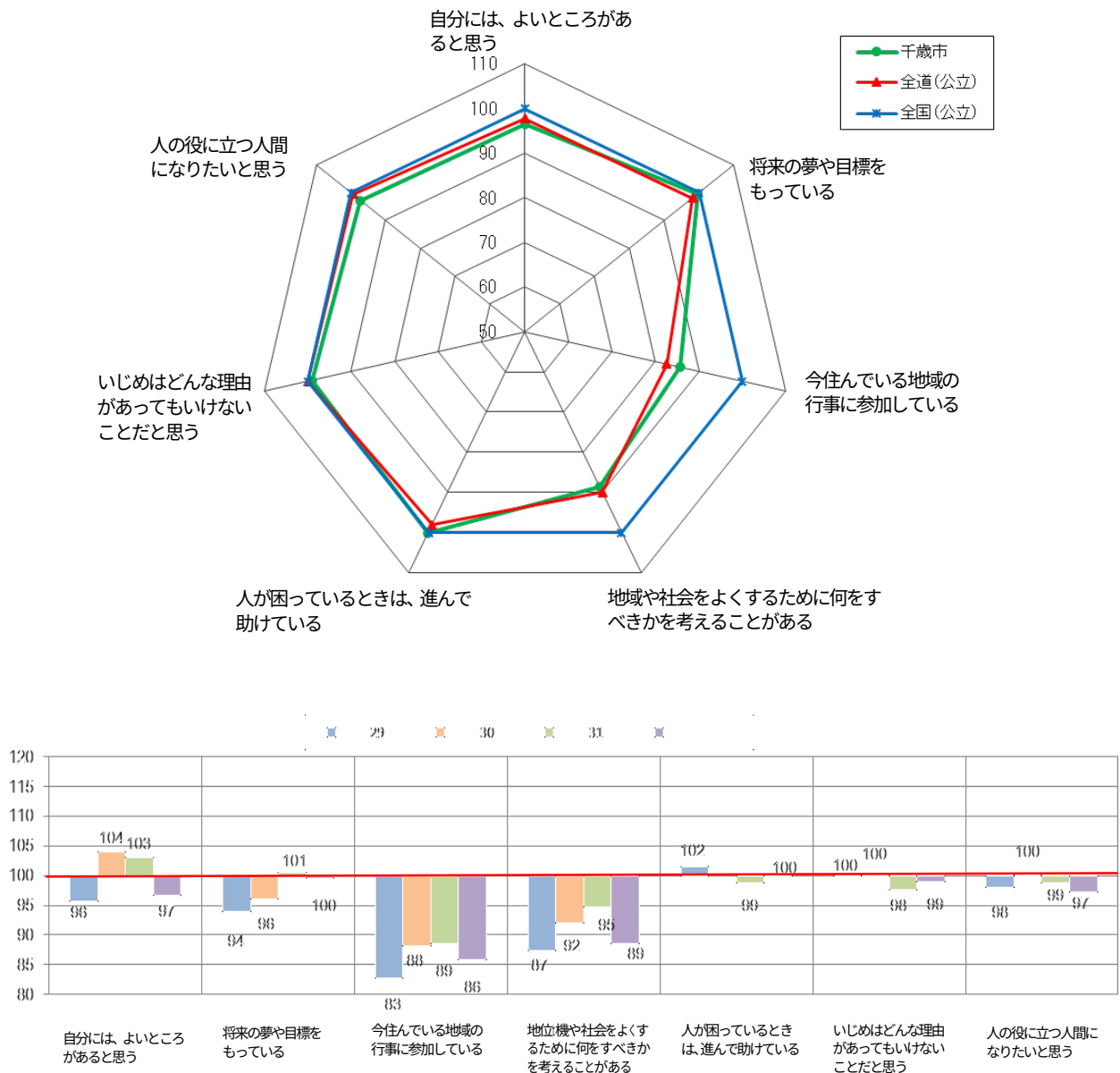


家庭での学習時間が少ない状況が続いている

家庭での学習時間については、学校が奨励している平日「2時間以上3時間未満」勉強すると回答した生徒の割合はやや増加しているが、依然、全国を下回る状況が続いている。「普段、3時間以上勉強している」「土日に2時間以上勉強する」生徒の割合はやや増加しているが、全国よりも相当低く、家庭での学習時間を増やす取組を全市的に展開していく必要がある。「自分で計画を立てて勉強している」生徒の割合は、前回と同じく全国とほぼ同様となっている。家庭での学習時間を増やすため、自ら学習の計画を立てる機会を設け、生徒の努力を積極的に認め励ます取組を通して、主体的に学習しようとする態度を育む必要がある。

千歳市の重要な課題である活用力を高めていくためには、複数の資料を関連付けて読み取ったり、情報を比較検討したりする能力が必要となる。新聞を読むことは、このような能力を高める効果があり、読書についても「すべての時間を勉強に費やすより、いくらかの時間を読書に割いた方が教科の学力が高い」ことが確認されている。本年度の調査では、「1日に10分以上、読書をしている」「週に1回以上新聞を読む」生徒の割合は全国を相当下回っており、大きな課題となっている。

(6) 中学校自己有用感・規範意識



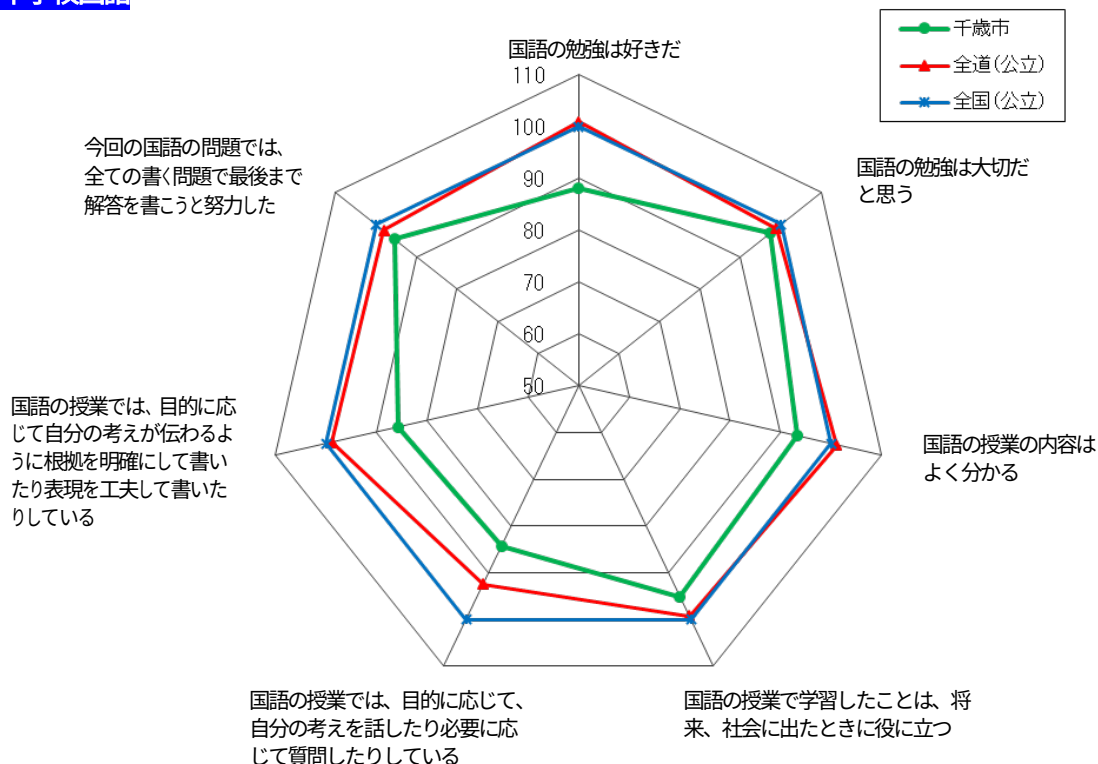
自己有用感はやや低下傾向、地域行事への参加・関心は低い状況が見られる

自己有用感については、これまで全国を上回っていた「自分には、よいところがあると思う」と回答した生徒の割合が、前回よりも低くなり全国を下回っている。「将来の夢や目標もっている」は全国とほぼ同様となっている。地域との関わりについては、「今住んでいる地域の行事に参加している」「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」と回答した生徒の割合が、全国を相当下回っている。小学生と同様、人の集まりやかかわりの少なさが、生徒質問紙の回答にも反映している。

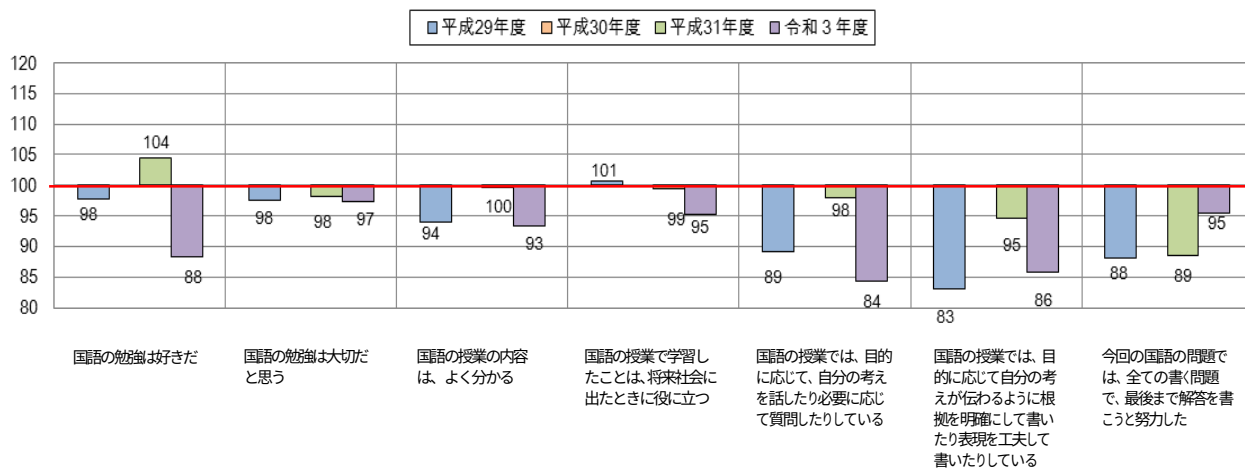
他者理解については、「人が困っているときは、進んで助けている」「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した生徒の割合は全国とほぼ同様のレベルを持続している。各学校の生徒会による主体的な「いじめ撲滅運動」等が、生徒の他者理解への意識を高め、成果となって表れている。

今後もハイパーQ検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、学級満足度を高める学級経営を推進し、規範意識や自尊感情を一層高めていくとともに、他者を思いやる心を育てることが大切である。

(7) 中学校国語



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



「国語の勉強が好きだ」が前回を大きく下回り、ほぼすべての項目で低下傾向が見られる

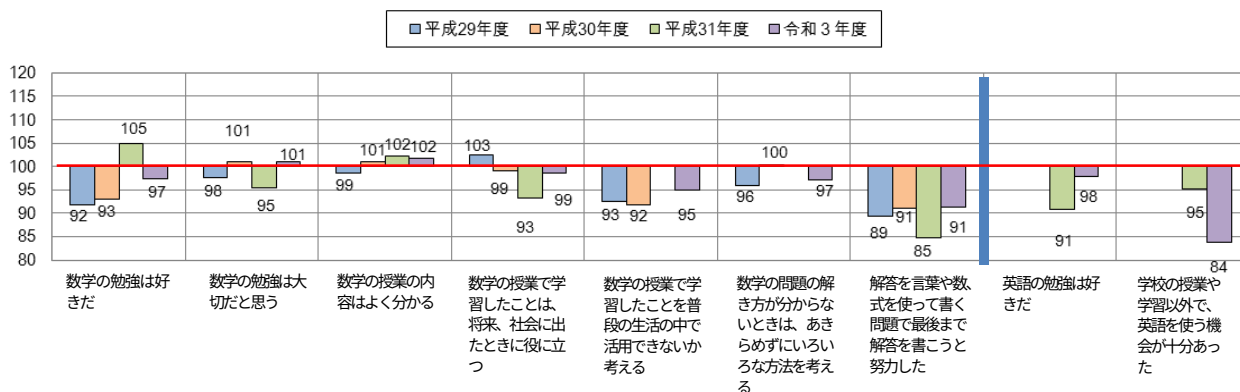
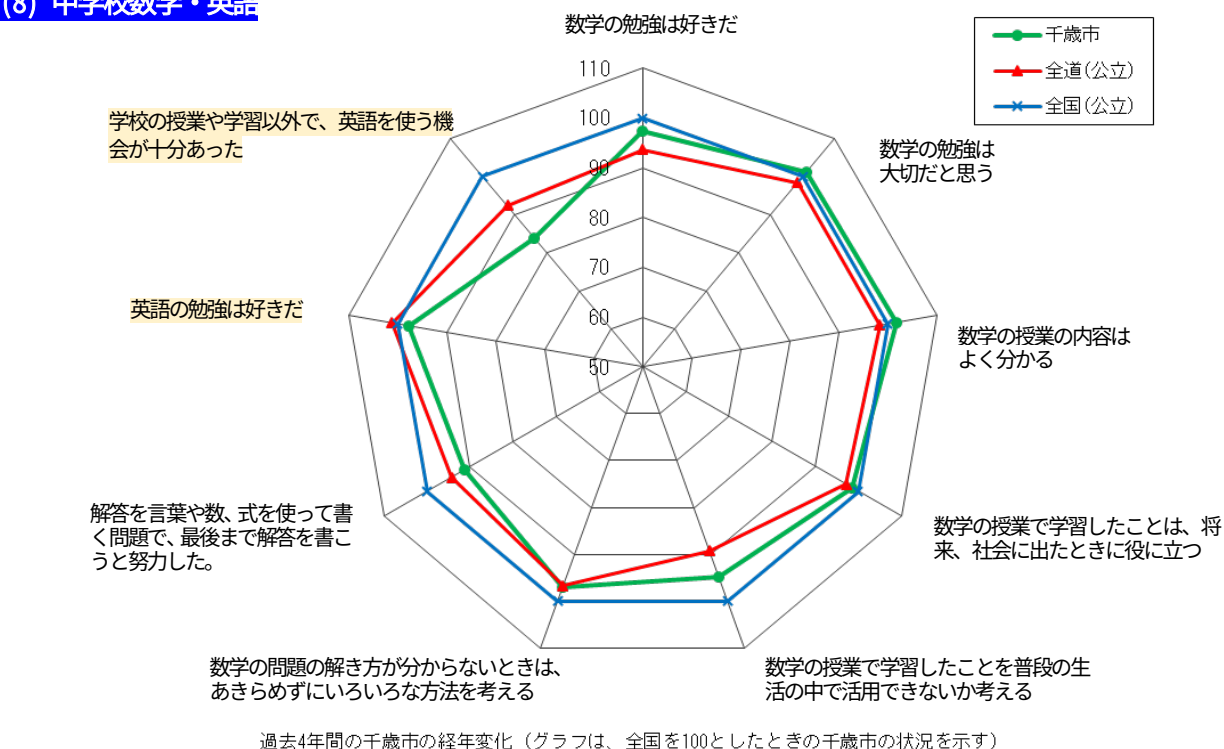
国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強が好きだ」と回答した生徒の割合が前回よりも大きく低下し、全国をかなり下回っている。また、「国語の勉強は大切」「国語の授業の内容はよく分かる」「国語の授業で学習したことは、将来役に立つ」についても全国を下回り、大きな課題となっている。

国語の学び方については、「目的に応じて、自分の考えを話したり必要に応じて質問したりしている」「自分の考えが伝わるように根拠を明確にして書いたり表現を工夫して書いたりしている」と回答した生徒が、全国を大きく下回っており、各学校による主体的な学習の取組への一層の努力が求められる。

一方「全ての書く問題で、最後まで解答を書こうと努力した」は、前回よりも改善傾向となっている。

今後の改善の視点として、単元で身に付けた力を生かし、原因と結果、意見と根拠などを論理的に捉え、自分の考えとして表現する取組を進めるとともに、読書や新聞など授業以外で文字に触れる機会を増やしていくことが重要である。

(8) 中学校数学・英語



数学好きの生徒の割合は低下傾向、有用性を感じる生徒は向上傾向

「数学が好き」と回答した生徒の割合は前回よりも低下し、全国をやや下回っている。一方、「数学の勉強は大切」「授業の内容はよく分かる」「数学は将来社会に出たときに役に立つ」と回答した生徒の割合は全国とほぼ同様となっており、数学の学習に有用性を感じる生徒が増えている。

数学の学び方については、「授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」「問題の解き方が分からないときは、あきらめずに考える」と回答した生徒が前回よりもやや向上している。

「言葉や数、式を使って書く問題で、最後まで解答を書こうと努力した」と回答した生徒の割合は4回連続で全国を大きく下回っている。今後も、解き方や考え方を書くことを重視した授業を工夫し、筋道を立てて考える力、言葉や数・式を使って数学的に表現できる力を高めていく必要がある。

英語に対する関心・意欲・態度が低く、英語を使う機会も少ない傾向が見られる

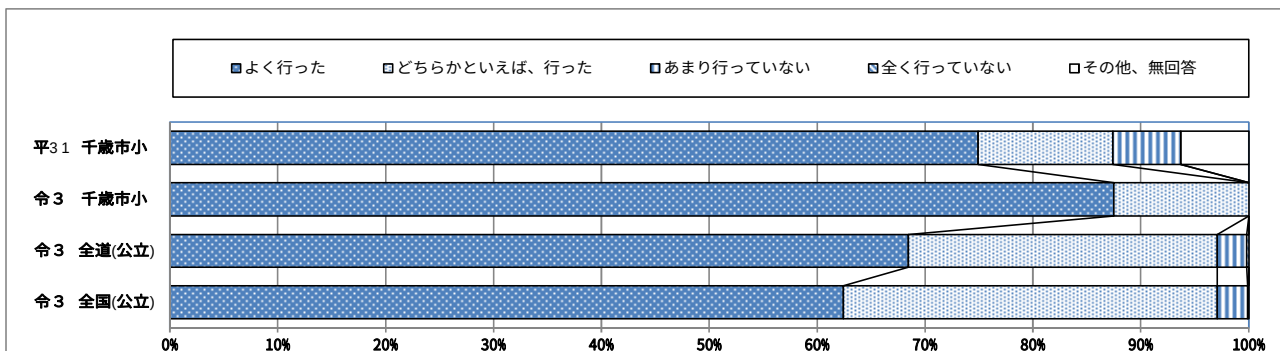
「英語の勉強は好きだ」と回答した生徒の割合は改善傾向で、全国をやや下回っている。「学校の授業や学習以外で英語を使う機会が十分ありましたか」については前回よりも低下し全国をかなり下回っている。継続的に英文を書いたり読んだりする学習活動に取り組み、日常的に英語に接する機会を作っていくことが大切である。

4. 学校質問紙の結果

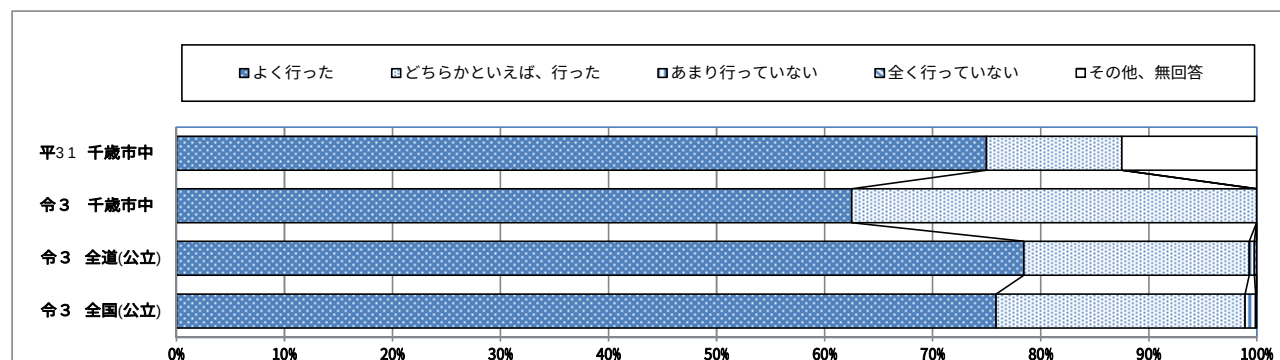
1 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言に関して

① 学習規律～維持徹底

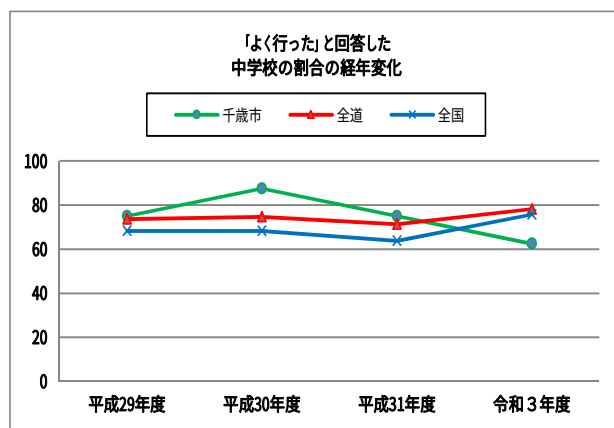
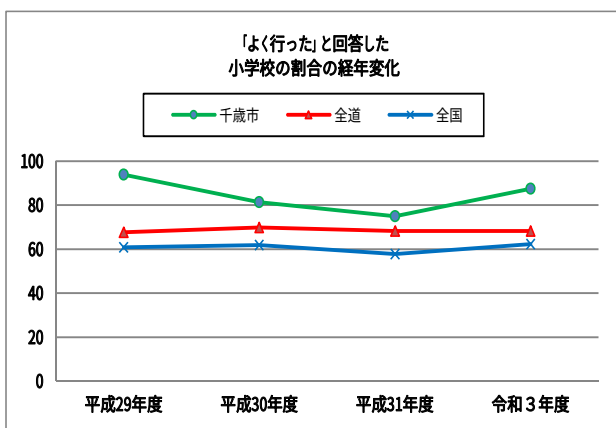
質問番号	質問事項
10	学習規律（他の人が話をしている時はしっかり聞く、授業開始のチャイムを守る）の維持を徹底しましたか。



＊調査対象学年の児童が平成31年度在籍していない小学校が市内に1校あり、前年度までの指導に関する質問項目に関しては無回答で処理。



平成31年度未記入1校

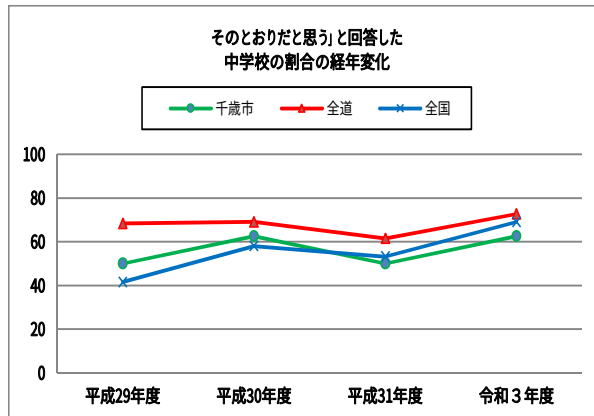
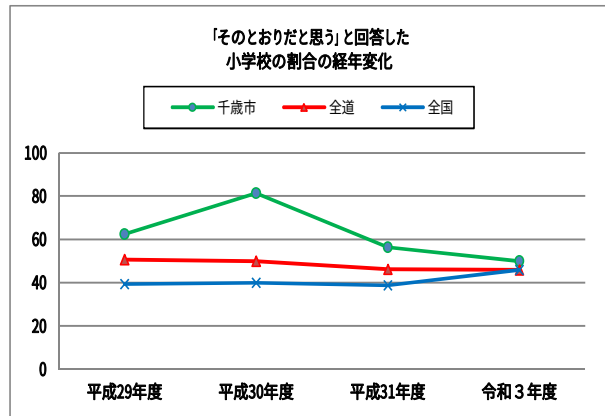
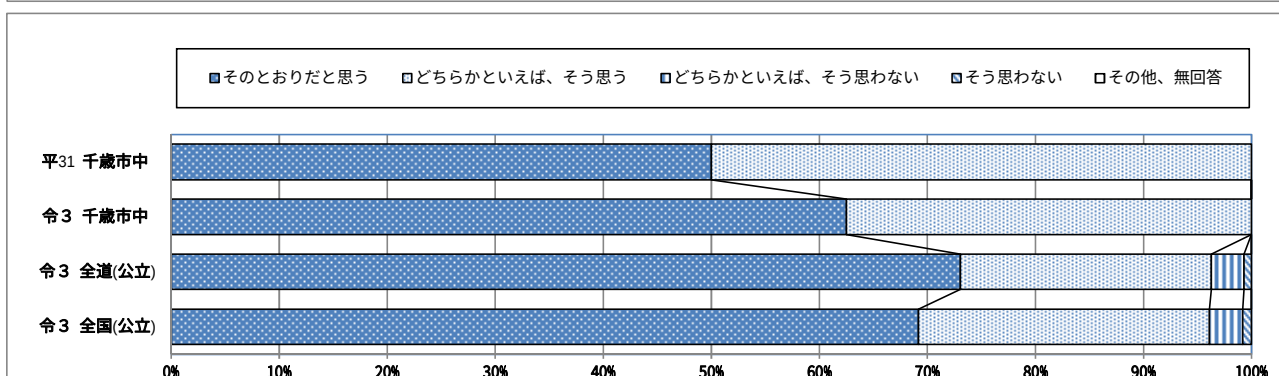
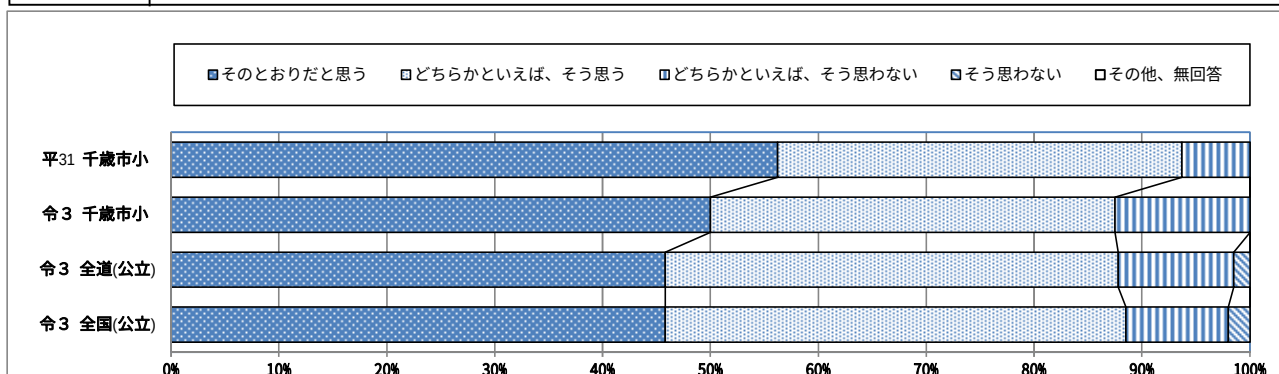


小・中学校、全ての学校において徹底が望まれる

学習規律の維持・徹底を「よく行った」と回答した学校は、小学校は87.5%で全国（62.3%）を上回っており、下降傾向から回復したが、中学校は62.5%で全国（75.8%）を下回り、2年連続減少していることから取組の減速が懸念される。学習規律の維持・徹底については市内のすべての学校が学校改善プランに位置付け、その実現を目指し全校的な取組を展開してきている。各学校においては、学習に集中できる環境を整え、児童生徒の学力の向上が図られるよう学習規律の維持・徹底に取り組んでいくことが大切である。

② 学習規律～落ち着いた学級

質問番号	質問事項
7	調査対象学年の児童（生徒）は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか。



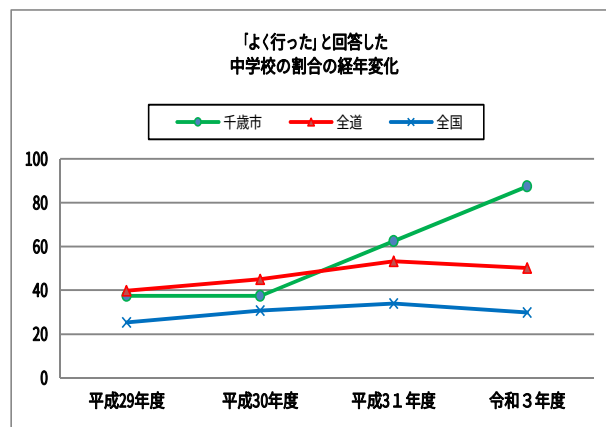
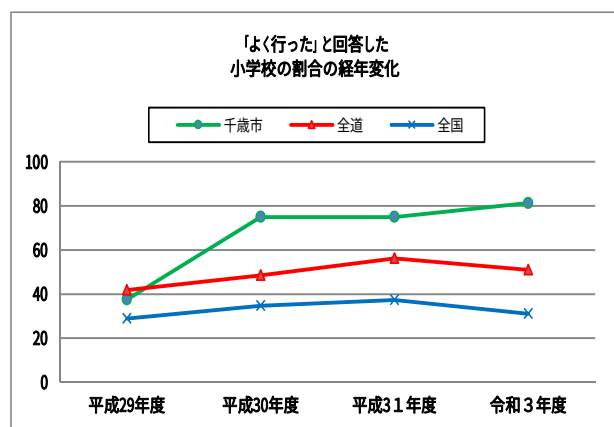
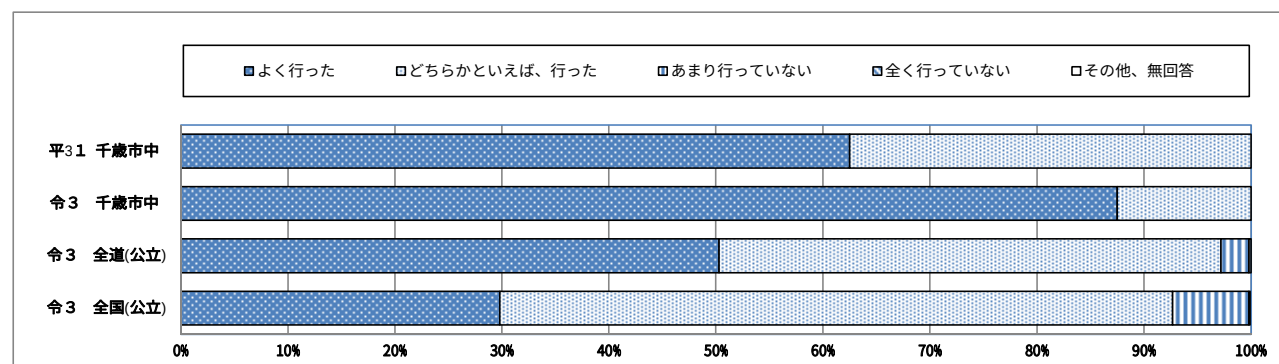
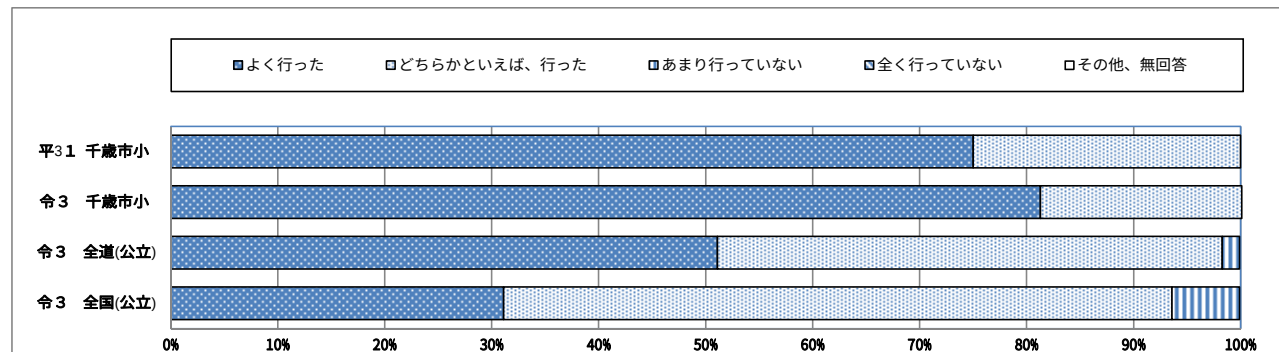
小学校は減少し中学校は増加している

「そのとおりだ」と回答した学校の割合は、小学校は50.0%であり、全国（45.8%）を上回っているが、2年連続減少している。中学校は62.5%であり、全国（中69.1%）を下回っているが、回復の傾向が見られる。

私語のない落ち着いた学習環境は学力向上の基盤である。今後も児童・生徒にきまりを守ることによって学習に集中できること、その結果、わかるようになり、学ぶことがおもしろくなることを理解させることが大切である。また、学年が進むことによる学級替えや担任交代等に左右されないよう、校内で統一した取組を行う必要がある。更に、年に2回市内全校（北進小中学校を除く）統一で行っているハイパーQU検査の結果をよく分析し、学級の状態を常に客観的に把握するとともに、改善策に素早く着手できるよう、校内で結果を共有し、効果的な取組を交流することも重要である。

③ 検証改善サイクルの確立

質問番号	質問事項
19	児童（生徒）の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか。

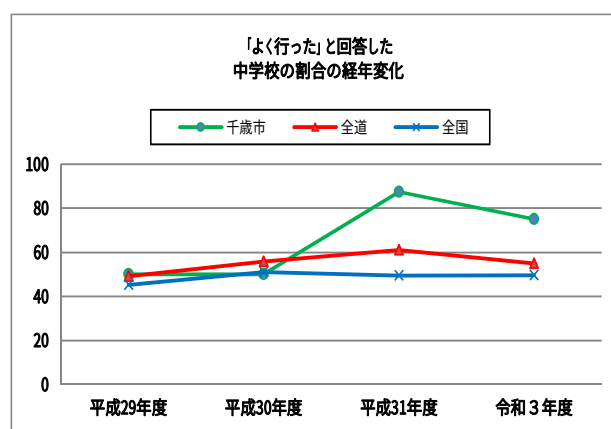
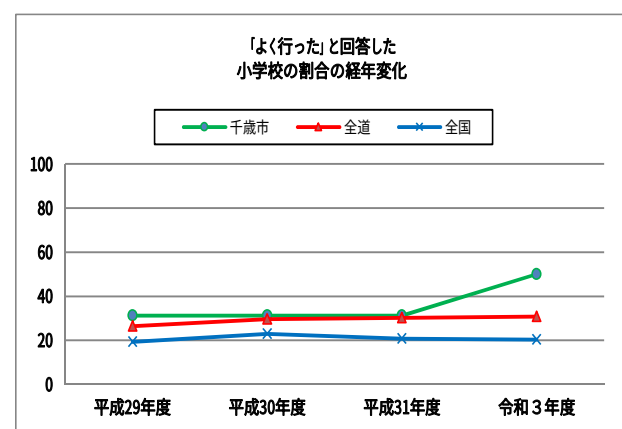
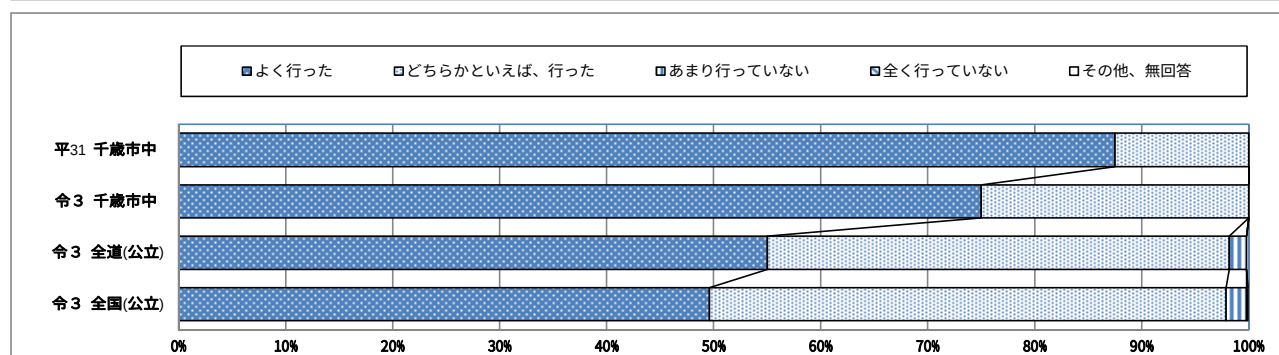
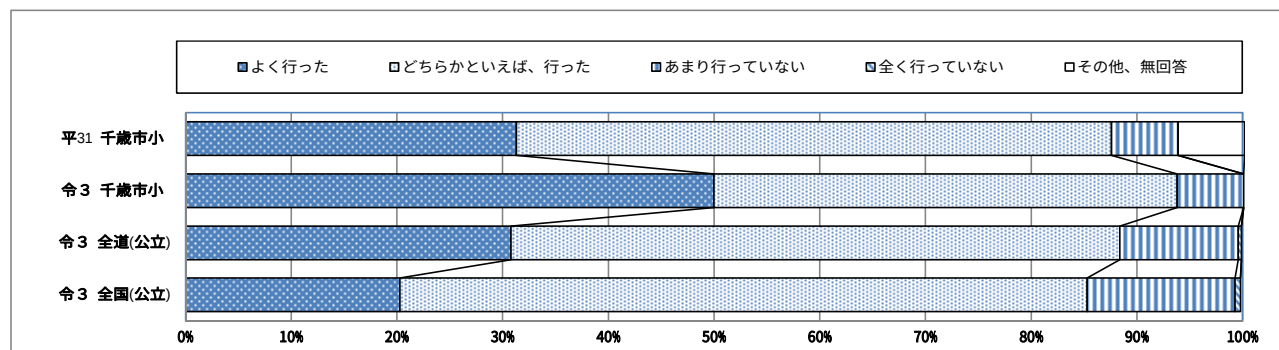


小・中学校ともに全国を大きく上回る取組がなされている。

「よく行った」と回答した学校の割合は年々増加し、小学校は 81.3%、中学校は 87.5%と全国（小 31.1%、中 29.8%）を大きく上回る取組がなされている。学力向上の取組を組織的、計画的に実行し、成果につなげるためには、計画、実施、評価、改善のサイクルの確立が必要である。特に評価活動については、取組の成果を数値により客観的に把握し、実施効果の高い取組は継続し、実施効果の低い取組については改善を図るなどの措置を講じていくことが重要である。そのためには、全国学力・学習状況調査結果はもとより市独自で実施しているNRT学力検査、ハイパーQU検査の分析結果から課題を整理し、具体的な方策を全校一体となって実践するとともに進行管理を徹底し、検証改善サイクルの確実な運用を図ることが大切である。

④ キャリア教育

質問番号	質問事項
8	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか。



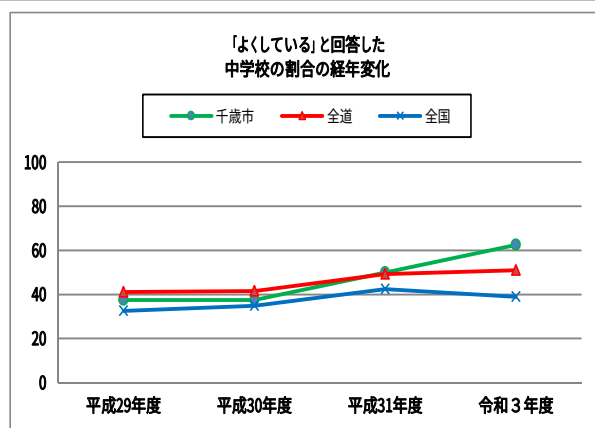
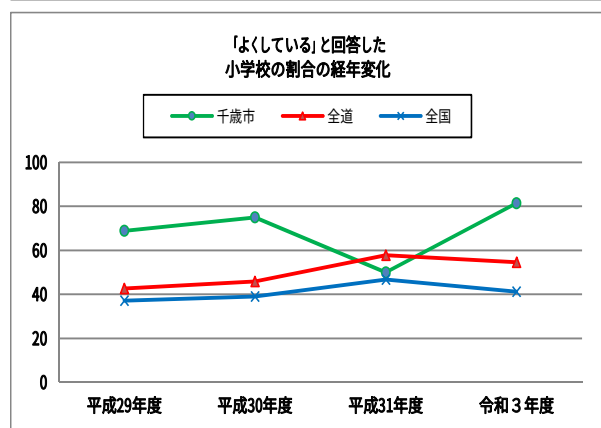
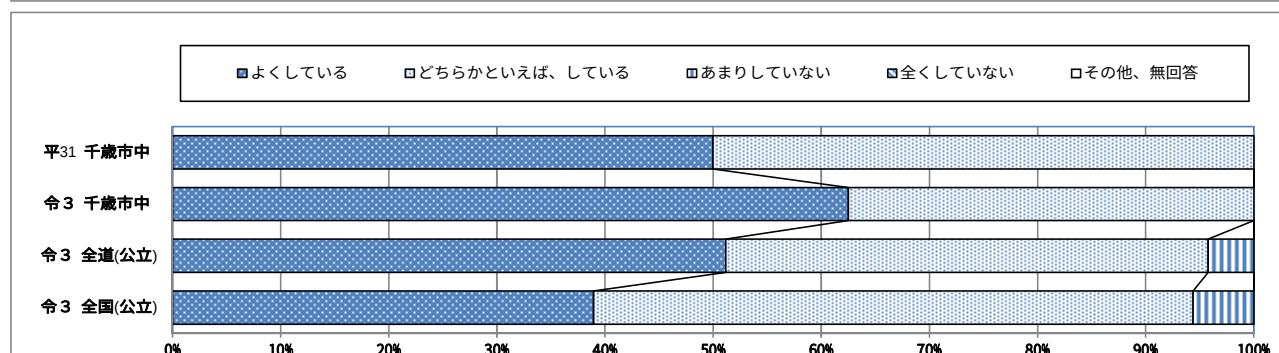
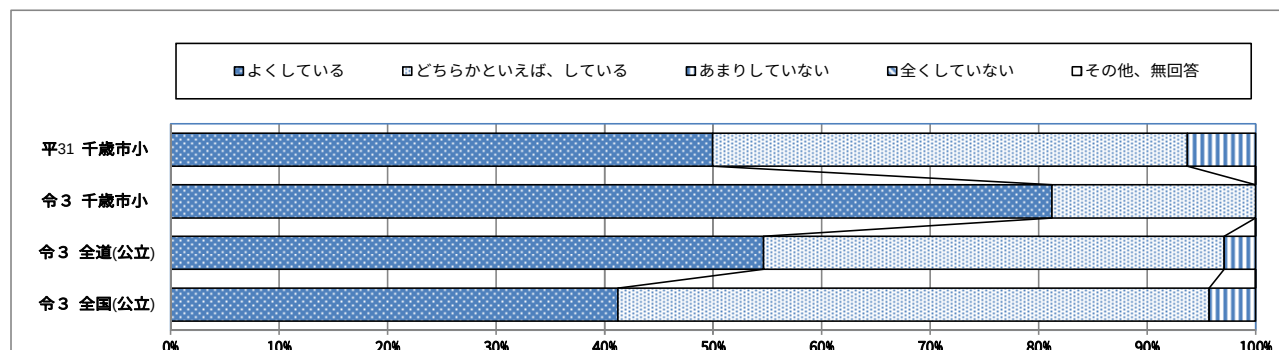
小学校、中学校とも全国を上回る取組が行われている。

「よく行った」と回答した小学校は50.0%であり、前回（平成31年度）より18.7ポイント増加して全国(20.3%)を上回っている。中学校は75.0%であり、前回より12.5ポイント減少したが全国(49.6%)を上回っている。児童生徒質問紙において「将来の夢や希望をもっている」と回答した児童生徒は、全国を100とした指数で小学校においては94.8ポイント、中学校では106.1ポイントである。夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、前向きに自己の将来を設計する指導については引き続き一層の充実を図る必要がある。各学校においては特別活動の学級活動を要として全ての教育活動が児童生徒のキャリア形成につながっていることをふまえ、ボランティア活動や地域人材の活用、職場体験学習等の取組を通して自己有用感を高め、社会人としての自立を目指す積極的な姿勢を育て、夢や目標をもって学校生活を送らせることが必要である。

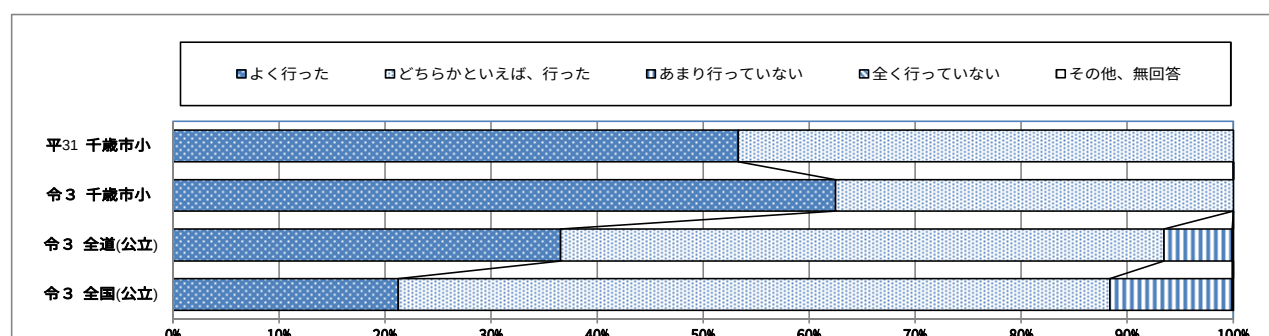
＊以降、平成31年度を前回と記載

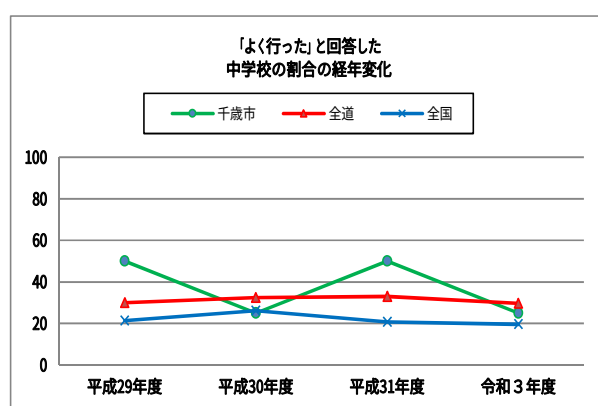
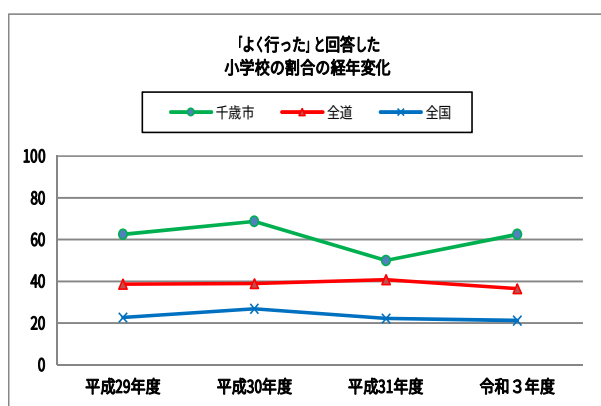
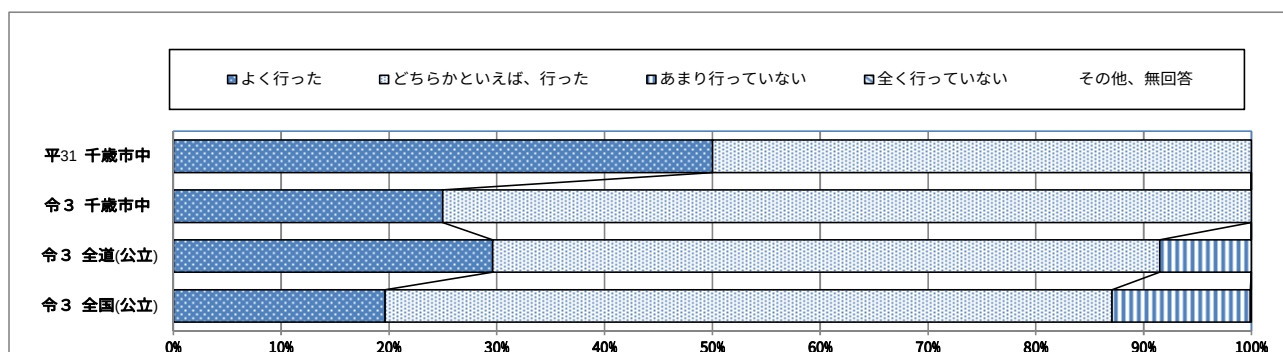
⑤ 授業改善～言語活動、習得・活用・探求の学習過程

質問番号	質問事項
21	言語活動について、国語科だけではなく、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて、学校全体として取り組んでいますか。



質問番号	質問事項
36	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、習得・活用及び探求の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか。





いずれも小・中学校ともに全国を上回っているが、一層の充実が求められる

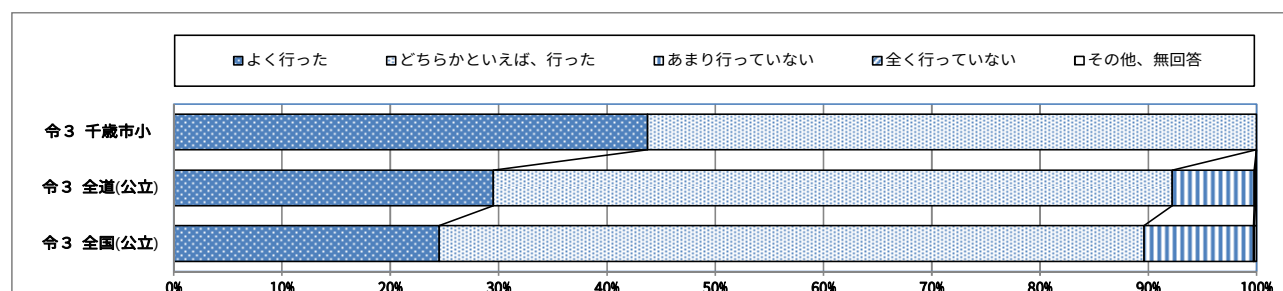
言語活動の取組について「よくしている」と回答した学校は、小学校は 81.3%、中学校は 62.5%であり、全国（小 41.2%、中 38.9%）を大きく上回っている。前回との比較でも、小学校は 31.3 ポイント、中学校は 12.5 ポイント増加した。

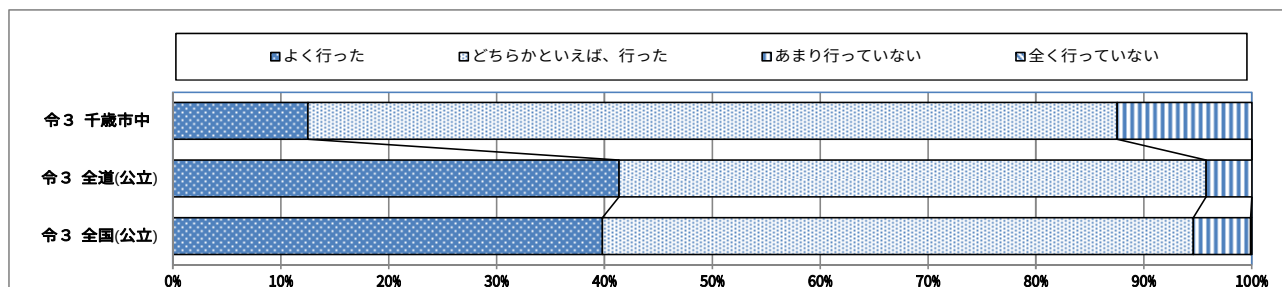
習得・探求の学習過程を見通した指導方法の改善および工夫を「よく行った」と回答した学校については、小学校は 62.5%で全国（21.2%）を大きく上回り、中学校においても 25.0%と全国（19.6%）を上回っている。前回との比較では、小学校は 12.5 ポイント増加し、中学校は 25 ポイント減少した。

学校では、言語環境を整え、各教科の特質に応じた言語活動（記録、要約、説明、論述、話し合い等）や読書活動の充実を図ってきた。これらの活動の質を高めながら習得・活用・探求という学習サイクルの確立を一層図ることが、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現するポイントとなる。その際、児童・生徒の実態から、活用できるようにしておく必要がある知識や語彙が十分でない場合は、単元において知識の習得にしっかりと時間をかけることに留意する必要がある。

⑥授業改善～国語・算数・数学の指導

質問番号	質問事項
53	国語の指導として、前年度までに、目的に応じて自分の考えとそれを支える理由との関係(根拠)を明確にして書いたり、表現を工夫したりする授業を行いましたか



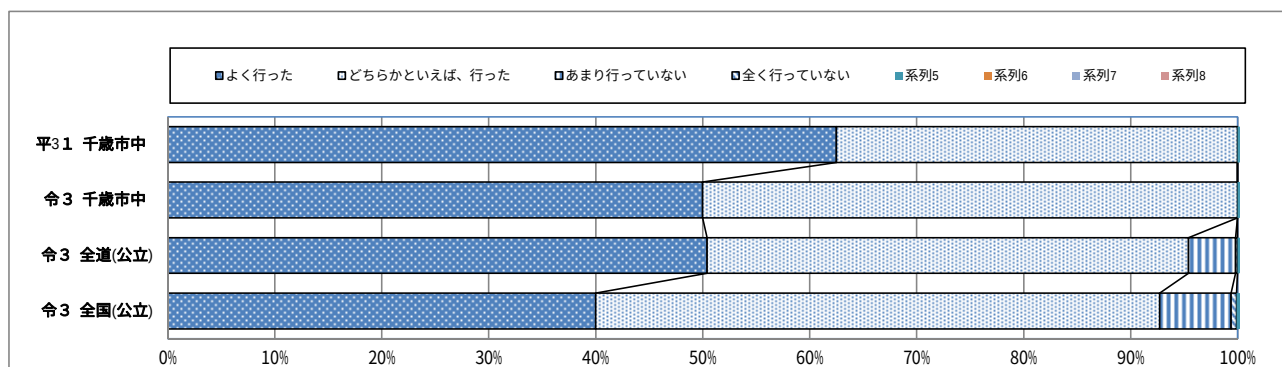
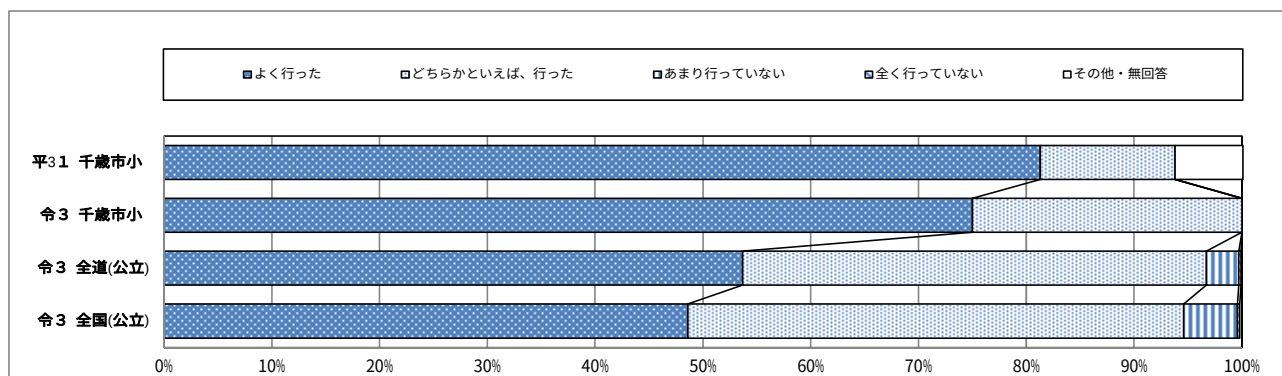


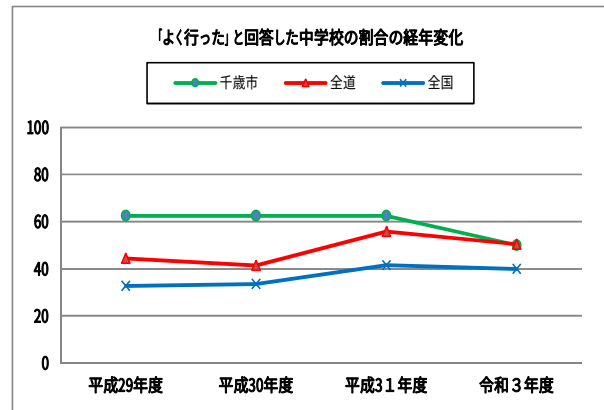
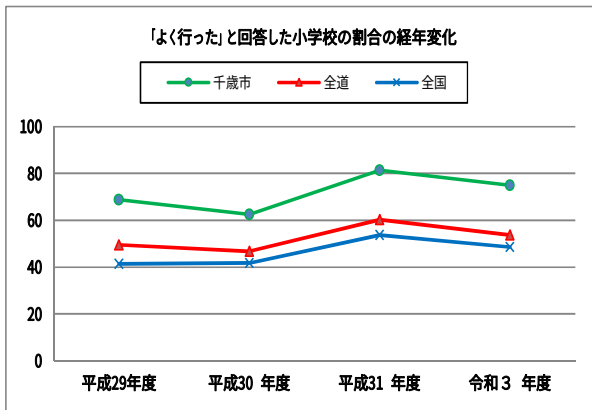
「根拠を明確にして書いたり表現を工夫したりする授業」の充実が求められる

国語の「根拠を明確にして書いたり表現を工夫したりする授業」について、よく行ったと回答した学校は、小学校は43.8%で全国（24.5%）を19.3ポイント上回り、中学校は12.5%で全国（39.7%）を27.2ポイント下回っている。

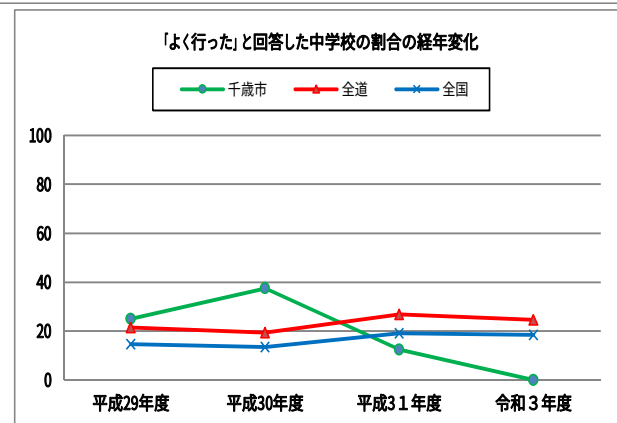
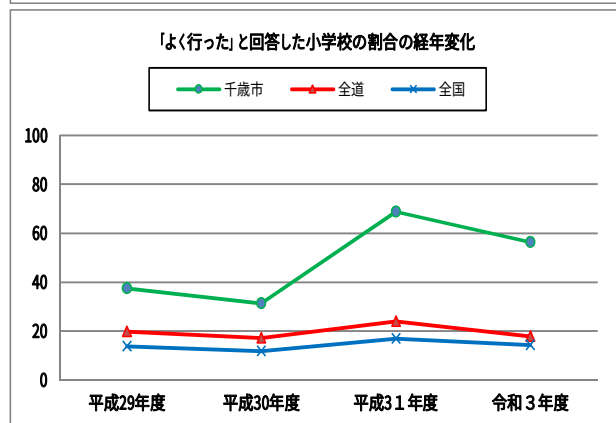
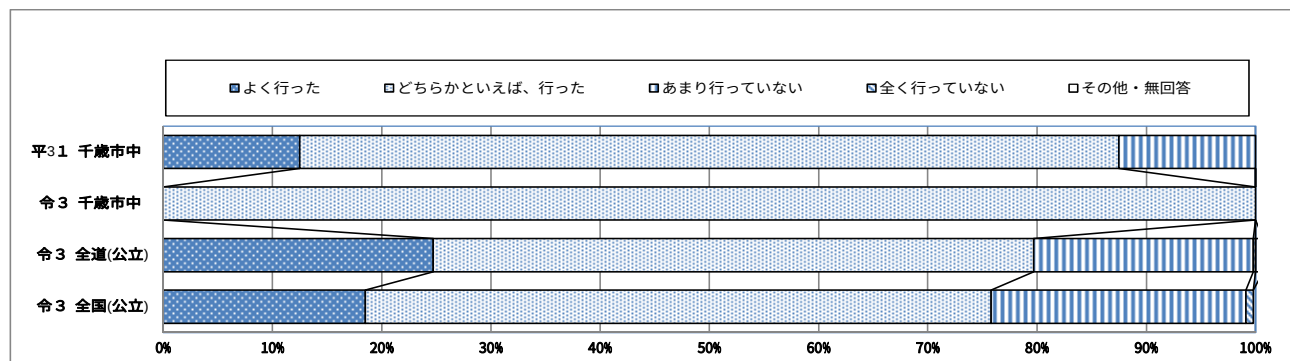
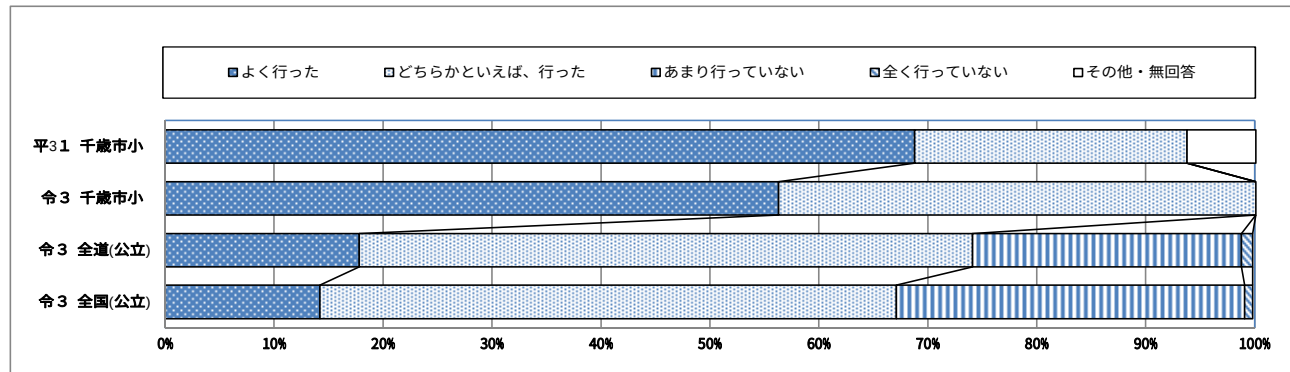
筋道の通った説得力のある文章を書く際には、理由（根拠）を明確にしながら自分の考えを述べる必要がある。さらに、読み手が理解しやすいように、文章全体の構成や展開を考えたり、目的や意図に応じて書き表し方を工夫したりすることが大切である。さらに、漢字を正しく書くことや主語と述語の関係に気を付けて書くことも求められる。そのためには、書いた文章を推敲する学習を繰り返し、書き直したものが読みやすくなったという実感の持てる指導が必要である。また、事象を説明したり意見を述べたりするなど、考えたことや伝えたいことを書く活動、事実や経験を基に感じたり考えたりしたことについて書く活動などを指導計画に位置付け、書く機会を増やすとともに、書いた文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の改善点や良い点に気付かせ、書く意欲を引き出す指導が大切である。

質問番号	質問事項
55	調査対象学年の児童（生徒）に対する算数（数学）の指導として、前年度までに、補充的な学習の指導を行いましたか。





質問番号	質問事項
56	調査対象学年の児童（生徒）に対する算数（数学）の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導を行いましたか。



算数・数学の「補充的な学習の指導」は全国を上回る

算数・数学の指導として、補充的な学習の指導を「よく行った」と回答した学校は、小学校では前回より6.3ポイント減少し81.3%、中学校では前回より12.5ポイント減少して50.0%であり、小・中学

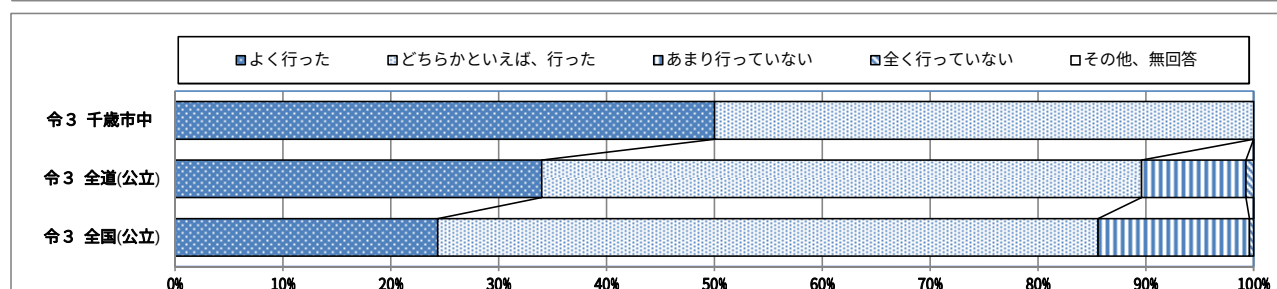
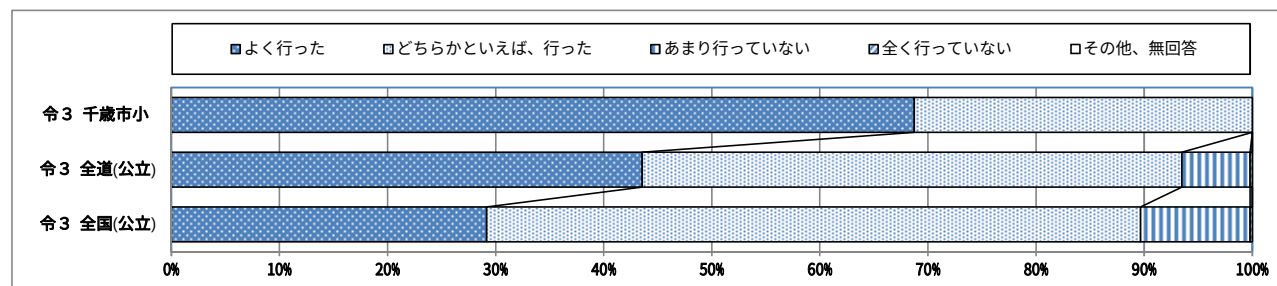
校ともに、全国（小 48.6%、中 40.0%）を上回っている。小学校、中学校ともに学習内容の確実な定着を図るため補充的な学習を重視している状況が見られる。

一方、発展的な学習の指導を「よく行った」と回答した学校は、小学校では前年度より 12.5 ポイント減少して 56.3%、中学校については、前年度より 12.5 ポイント減少し、「よく行った」と回答した学校はなかった。全国（小 14.2%、中 18.5%）との比較では、小学校は上回り、中学校は下回っている。

小学校においては、平成 27 年度より学習支援員を活用した習熟度別少人数指導が小規模校を除く市内全校（13 校）で実施されており、習熟の程度に応じた指導が浸透してきている様子が窺える。中学校においても平成 31 年度には学習支援員が小規模校を除く 6 校全てに配置されたことから補充的な指導のみならず、発展的な学習の指導の充実が期待される。今後においても、学校種、学校規模に関わらず、個に応じたきめ細かな学習指導や習熟の程度に応じた指導を実施し、学習内容の確実な習得を図ることはもとより、知識を活用して問題を解決する能力を一層高めていくことが必要である。

⑦ 家庭学習の課題を指導改善、学習改善に生かす

質問番号	質問事項
87	家庭学習の取組として、学校では、児童（生徒）が行った家庭学習の課題について、その後の教師の指導改善や児童（生徒）の学習改善に生かしましたか（教科共通）



小学校、中学校ともに全国を上回っている。

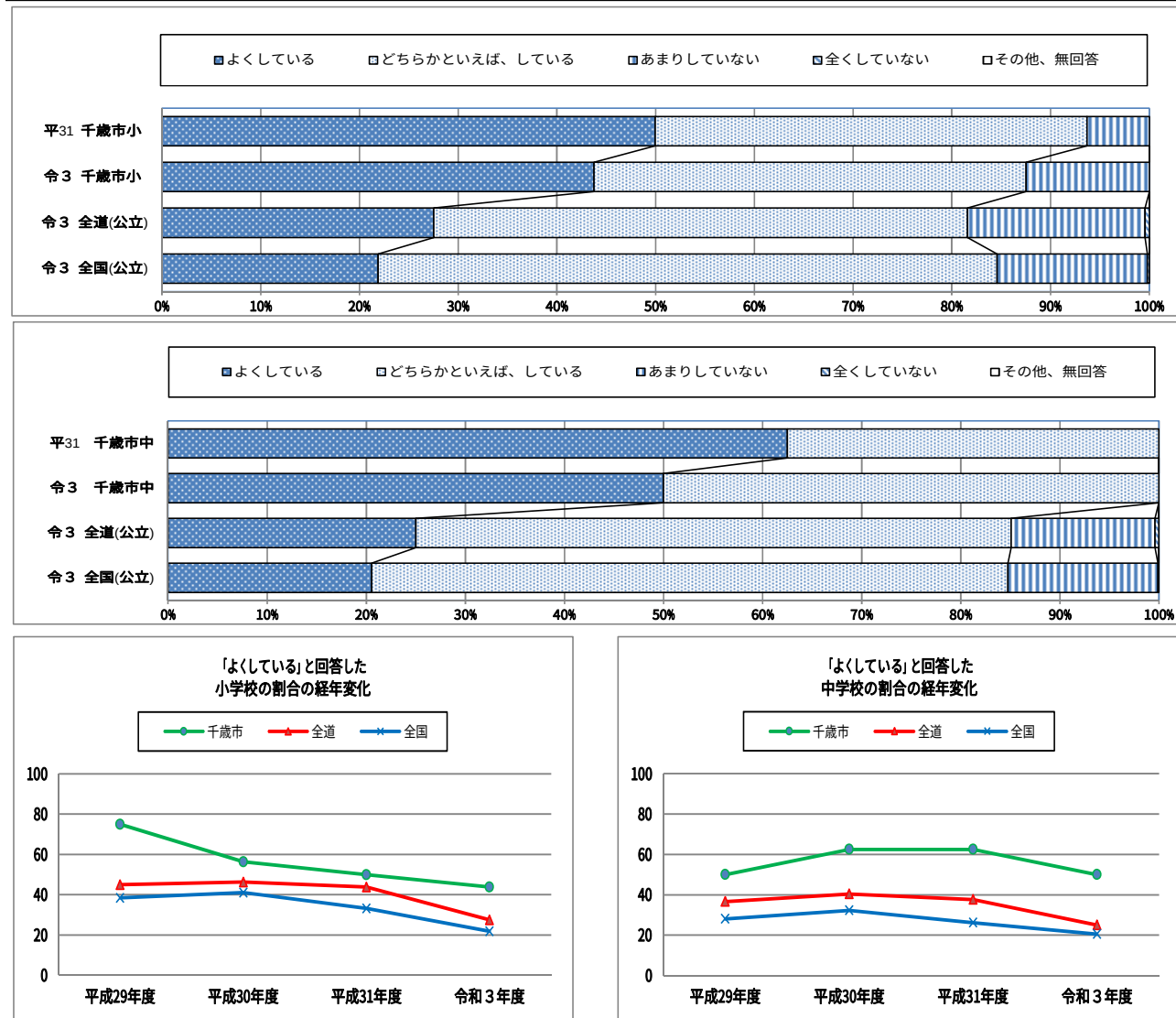
家庭学習の課題を指導改善や児童生徒の学習改善に生かす取組を「よく行った」と回答した小学校は 68.8%、中学校は 50.0% となっており、小・中学校ともに全国（小 29.1%、中 24.3%）を上回っている。学校は家庭学習の習慣が身に付くよう、そのきっかけ作りとして課題（宿題）を提供している。これまで各校においては、家庭学習の習慣づくりや内容の充実のため、「家庭学習の手引き」を作成・配布するとともに、具体例を挙げながら指導したり、学年・学級だよりに家庭学習のヒントを載せたりするなどの工夫・改善を図ってきた。

家庭学習の課題（宿題）を指導改善や児童生徒の学習改善に生かす取組については、これまでも理解が不十分な問題については授業等で確認し、期間をおいて再度与えるなど、与えた課題について確実に身に付けさせる指導について工夫が重ねられてきたが、今後は予習を生かす授業づくりなど、学校の授業と家庭学習をつなぐ仕組みの一層の構築が望まれる。

2 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」に関して

⑧ 教職員研修の充実

質問番号	質問事項
26	教職員は、校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させていますか。

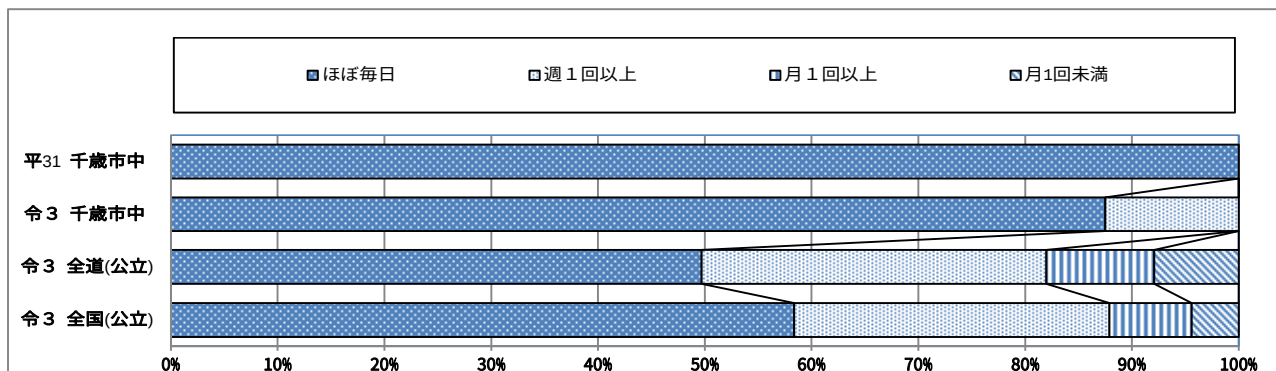
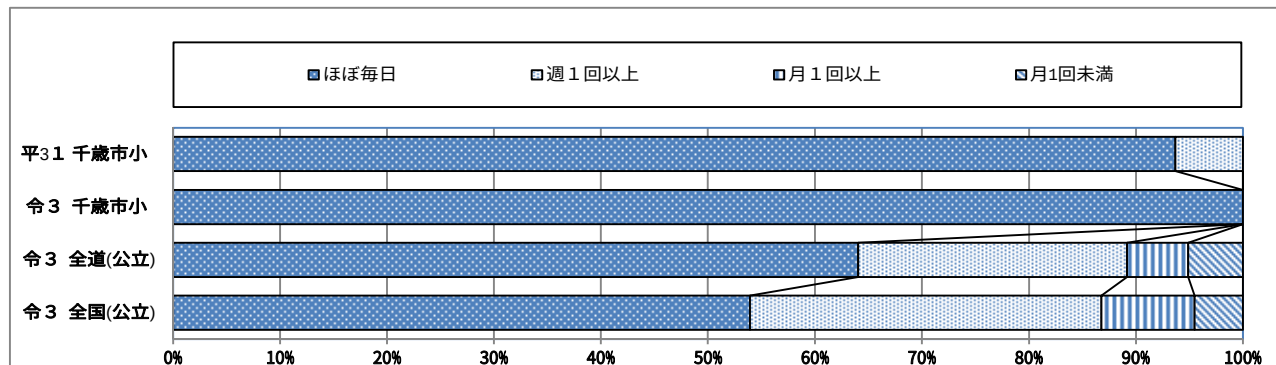


研修結果を生かす取組が行われている。

「よくしている」と回答した学校は小学校 43.8%、中学校 50.0%であり、小・中学校ともに全国（小 21.9%、中 20.5%）を上回るが、小学校は減少傾向にあり、中学校も前回より減少した。長期休業中に開催される千歳市教育委員会主催の研修や石狩教育研修センター主催の研修については、コロナ禍にあることを踏まえ、リアルタイムでのオンライン研修など参加の仕方を工夫しながら個別の学校では招聘できない著名な講師から直接教示を受けたり、授業期間には少ない時間を有効に活用したミニ研修や授業研究に取り組んだりしており、今日的課題に対応できる能力や授業力向上を目指す研修に取り組んでいる。今後は、個々の教員が受講した研修の結果を積極的に校内全体に還元し、授業改善に結びつく指導方法や教育課程の見直しを、より促進される校内の研修体制を構築していく必要がある。

⑨ ICT機器の活用

質問番号	質問事項
66	調査対象学年の児童（生徒）に対する指導において、前年度に教員が大型提示装置（プロジェクター、電子黒板等）等のICTを活用した授業を1クラスあたりどの程度行いましたか。



小・中学校とも積極的に活用されている。

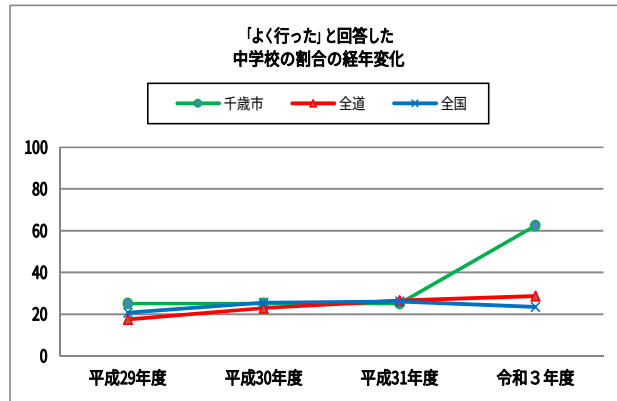
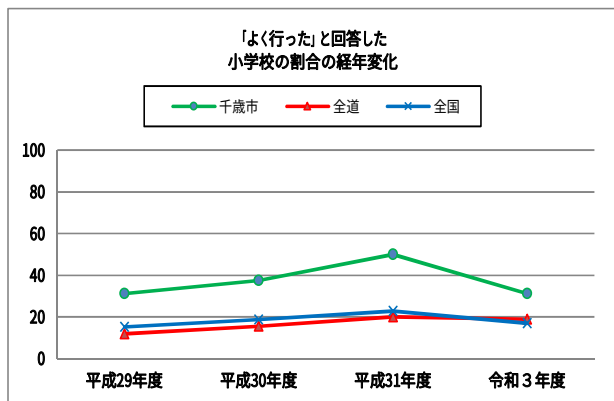
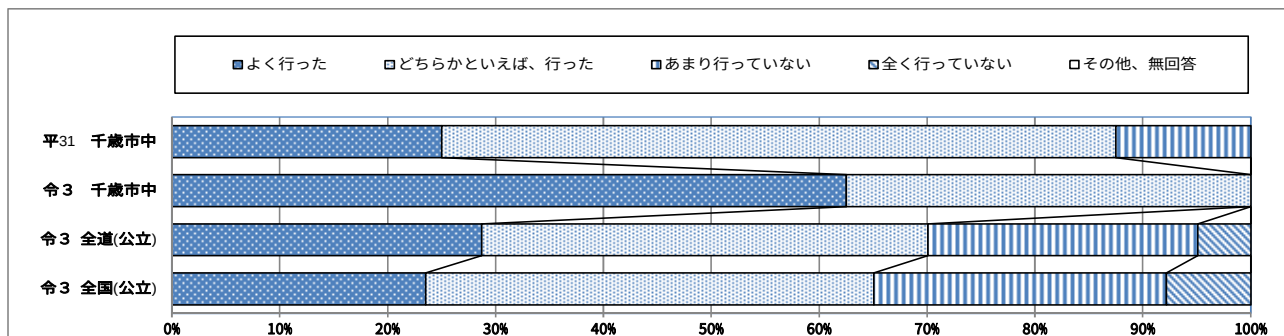
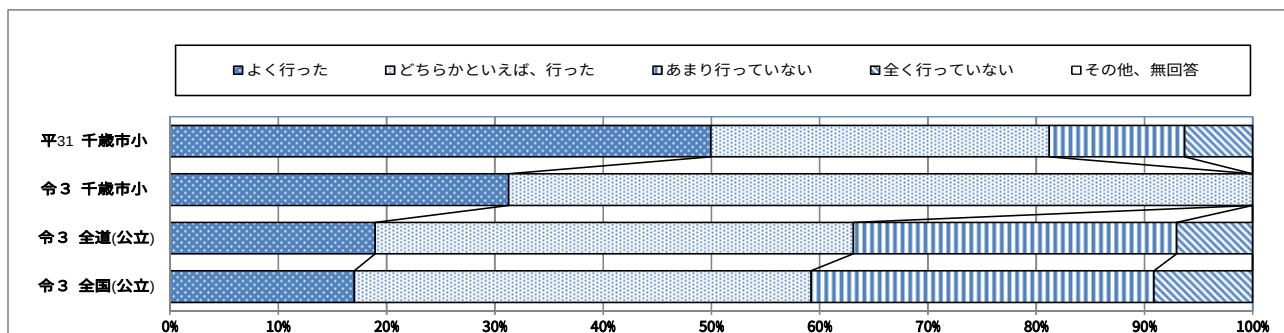
「ほぼ毎日」と回答した学校は、小学校で100%、中学校は87.5であり、小・中学校とも全国（小53.8%、中58.3%）を大きく上回り、積極的に活用されている。

本市では、全普通教室に加え、小学校少人数指導用教室、中学校特別教室、小・中学校特別支援学級教室への電子黒板・実物投影機等が配備され、デジタル教科書についても、平成28年度までに小・中学校への配備を終えたことから、全国、全道に比べて圧倒的にICT機器の活用頻度が高く、千歳の教育の特色となっている。今後は、通常の授業のみならずオンライン授業でのより効果的な活用方法等について校内外での研修を充実させ、授業改善に生かす取組を進めることが大切である。

3 小中連携・一貫教育の取組に関して

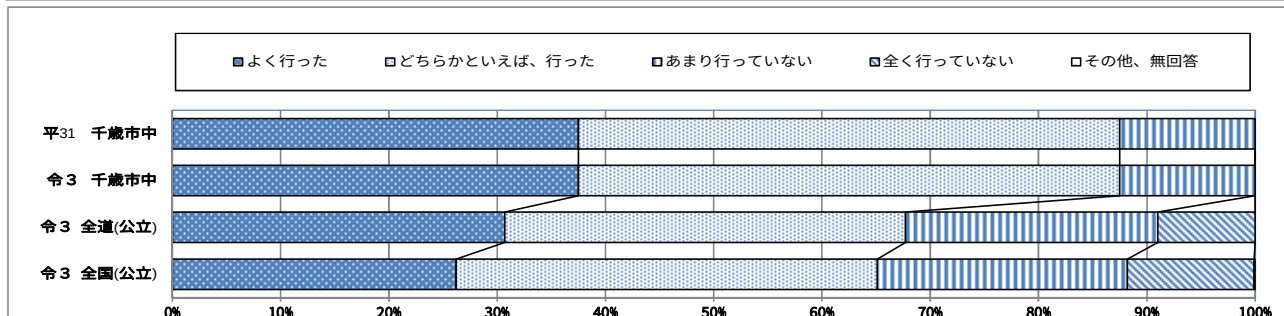
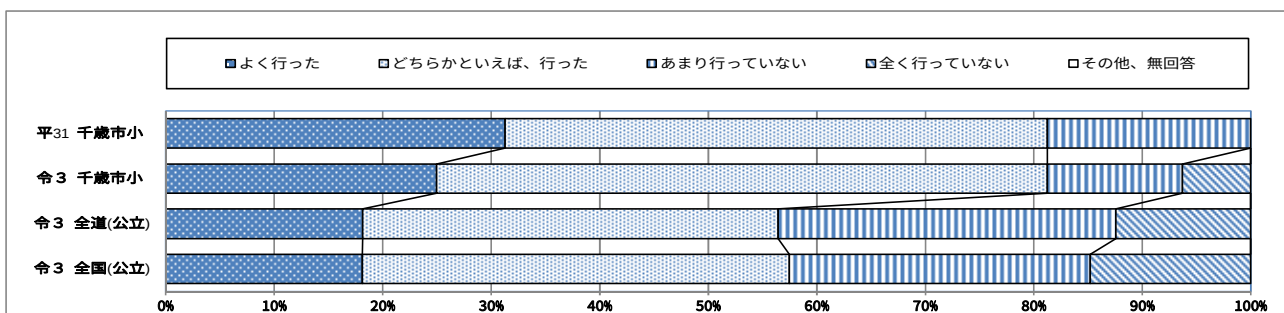
⑩ 教育課程に関する共通の取組

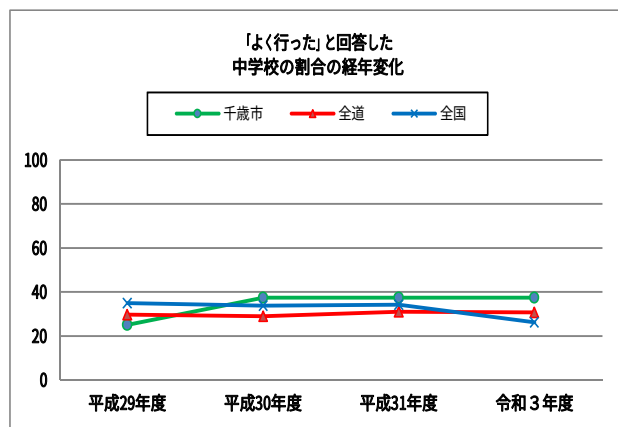
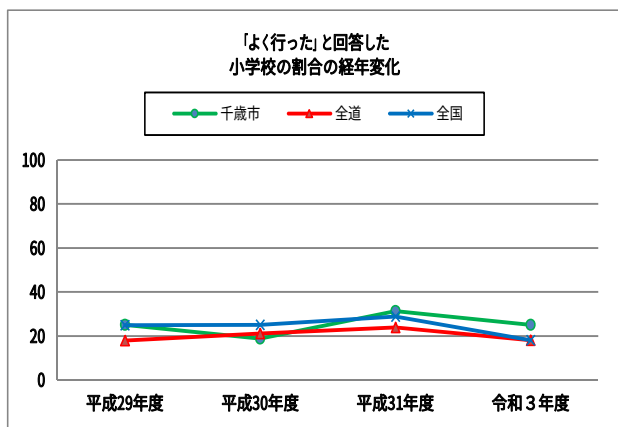
質問番号	質問事項
77	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行いましたか。



⑪ 合同の研修

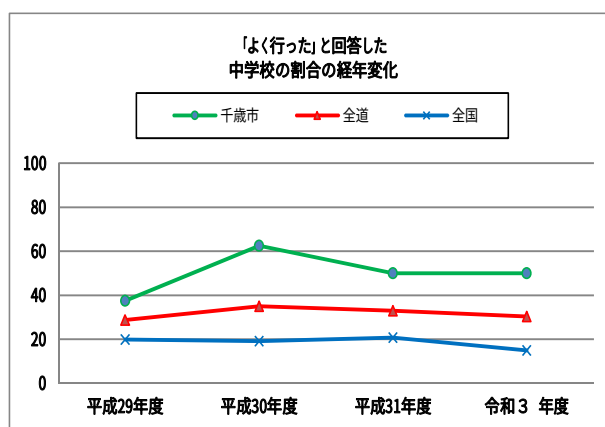
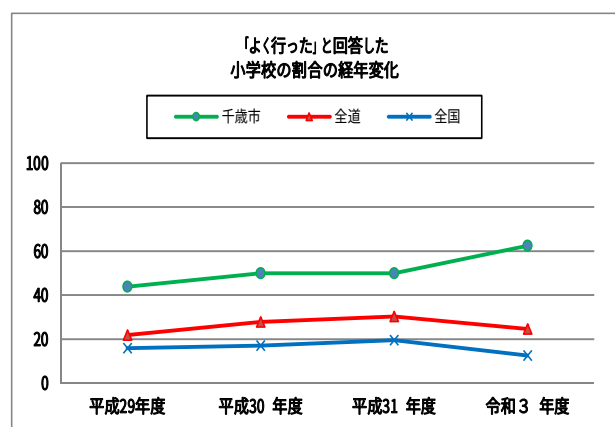
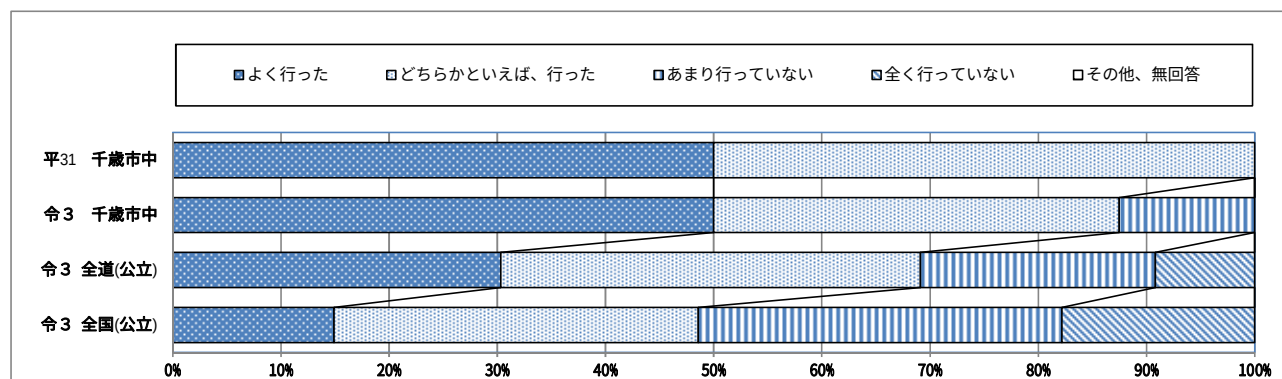
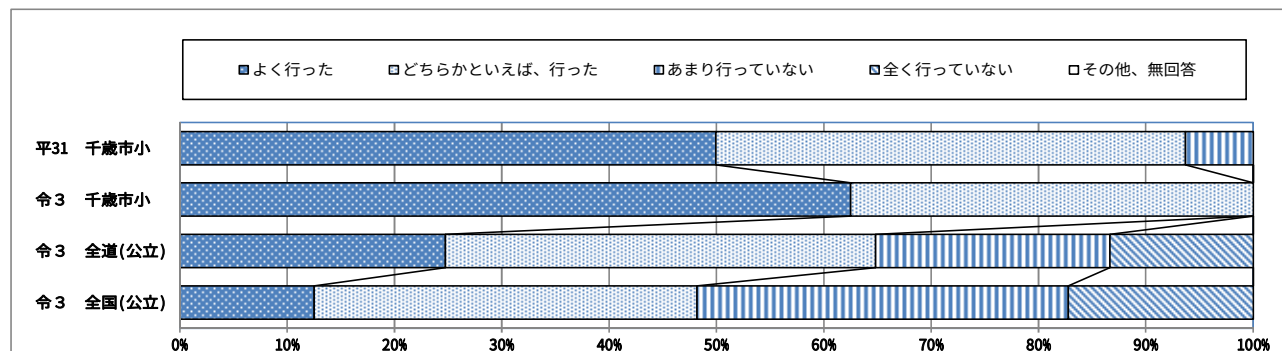
7 8	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行いましたか。
-----	---





⑫全国学力・学習状況調査分析結果の共有

質問番号	質問事項
79	平成30年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有しましたか。



小中連携・一貫の取組は今後深まっていくことが期待される

⑩「近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行ったか」という質問に対して、「よく行った」と回答したのは、小学校は前回より増加して 31.3%、中学校は前回同様 62.5%であり、小・中学校ともに全国（小 17.0%、中 23.5%）全国を上回っている。

⑪「前年度までに、近隣等の中（小）学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行ったか」という質問に対して「よく行った」と回答したのは、小学校は前回より減少して 25.0%、中学校では前回より増加して 37.5%であり、小・中学校ともに全国（小 18.1%、中 26.2%）を上回っている

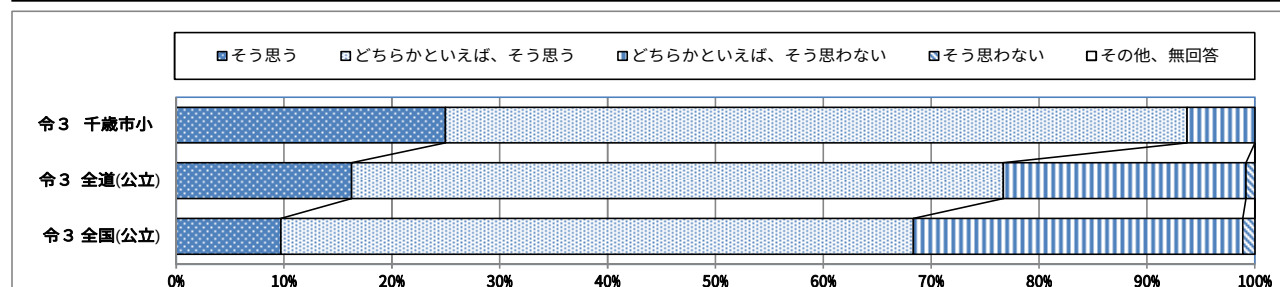
⑫「平成 31 年度（令和元年度）の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有したか」という質問では、「よく行った」と回答したのは、小学校は前回より増加して 62.5%、中学校では前回同様 50.0%であり、全国（小 12.5%、中 14.9%）を大きく上回っている。

小中連携・一貫教育の取組に関しては、市として平成 30 年度よりモデル校区を指定し、本格的に取り組んできたところである。今後は、全国学力・学習状況調査結果の共有をはじめとして、校区の子どもたちの義務教育 9 年間で身に付けさせるべき力を明確にして、教育課程や授業改善の方策について連携して取り組んでいくことが一層望まれる。

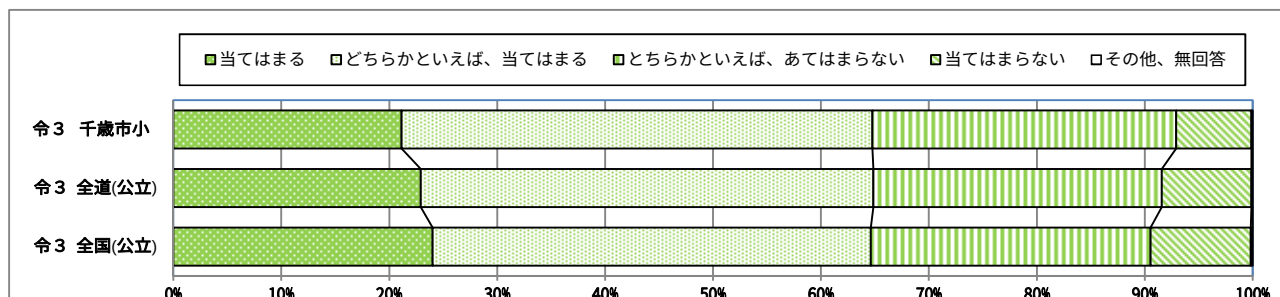
4 授業に対する教師と児童生徒の意識の違い（児童・生徒質問紙の回答と比較）

⑬ 主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善－1

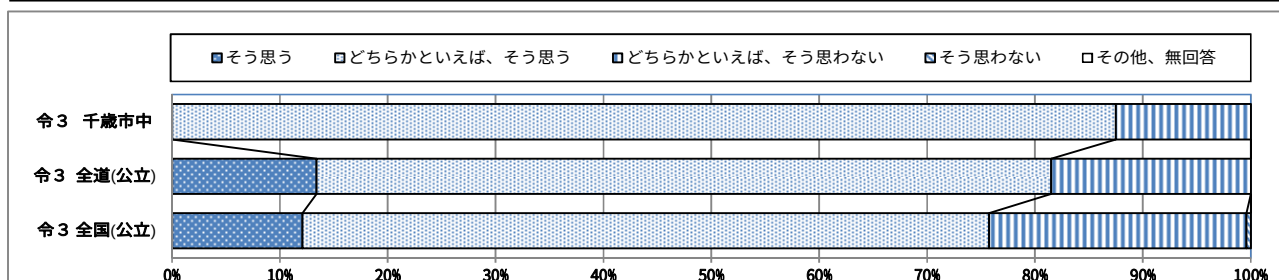
質問番号	質問事項
30	調査対象の児童は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。



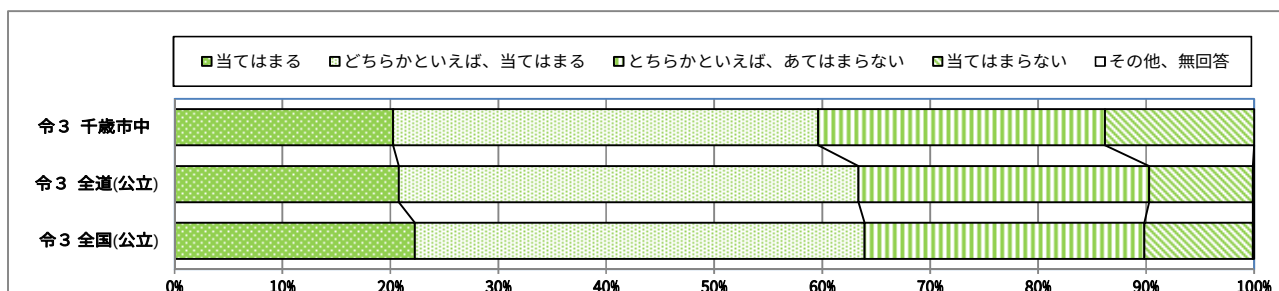
質問番号	質問事項（＊児童質問紙）
32	5年生までに受けた授業で自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。



質問番号	質問事項
30	調査対象の生徒は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。

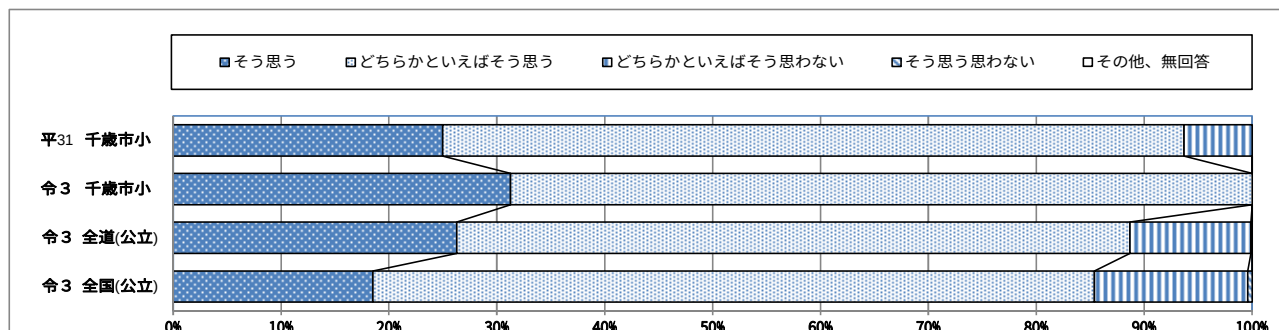


質問番号	質問事項（＊児童質問紙）
32	1，2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。

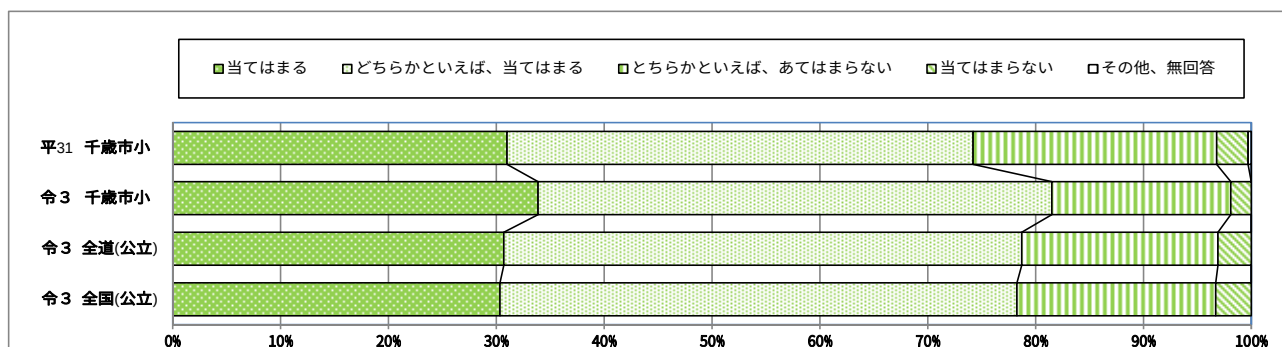


⑭ 主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善－2

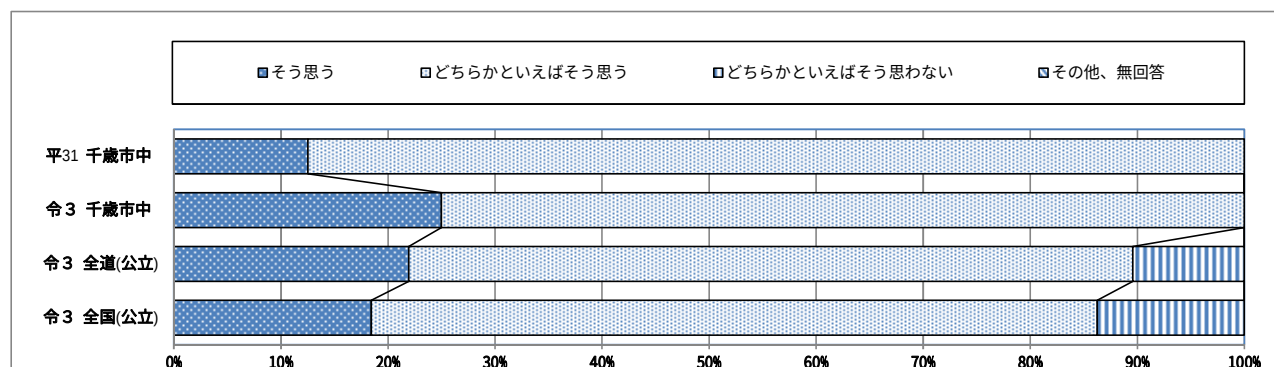
質問番号	質問事項
29	調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



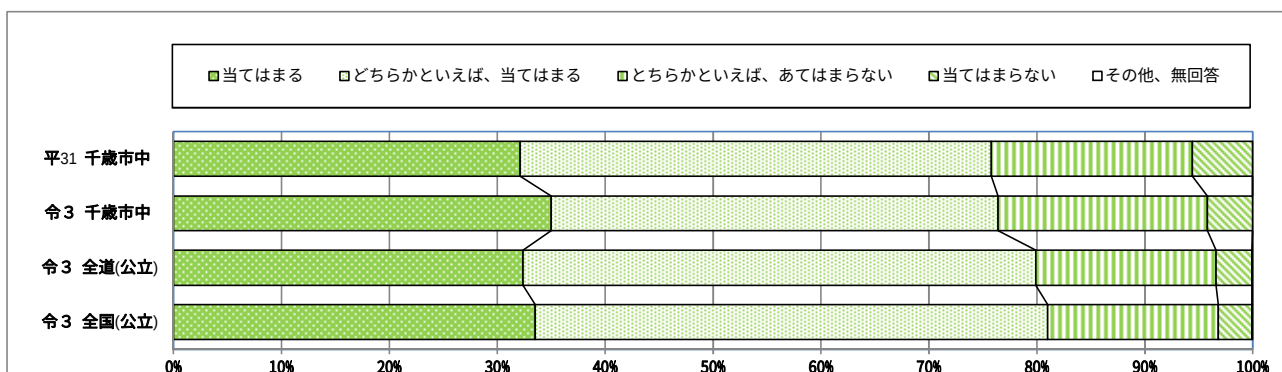
質問番号	質問事項（＊児童質問紙）
33	5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。



質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
29	調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



質問番号	質問事項（＊生徒質問紙）
33	1，2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。



授業に対する教師と児童・生徒の意識の差をさらなる授業改善に生かしていくことが望まれる

⑬「調査対象の児童・生徒は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思うか」という質問に対して「そう思う」と回答した学校は、小学校は 25.0%で全国（9.7%）を上回っている。中学校は「そう思う」と回答した学校はなく全国（12.1%）を下回っている。児童生徒質問紙の「これまでに受けた授業で自分の考えを

発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表したか」という質問に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生は20.9%（全国23.6%）、中学生は19.5%（全国21.0%）である。教師と、指導を受ける児童・生徒との意識の差は、小学校は4.1ポイント、中学校は19.5ポイントである。

⑭「調査対象学年の児童・生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思うか」という質問に対して小学校は前回より6.3ポイント増加して31.3%、中学校は12.5ポイント増加して25.0%である。児童生徒質問紙の「これまでに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思うか」という質問に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生は前年度より2.9ポイント増加して33.9%、中学生は前回より2.9ポイント増加して35.0%であり、小・中学校ともに全国（小30.3%、中33.5%）を上回る。教師と、指導を受ける児童・生徒との意識の差は、小学校は2.6ポイント、中学校は10.0ポイントであり、小・中学校とも前回（小6.0ポイント、中19.6ポイント）との比較ではその差が縮まり、改善の傾向が見られる。

このような状況を踏まえて授業に対する教師と児童・生徒の意識の差を分析し、授業改善に生かしていくことが重要である。そのためには児童・生徒による授業評価の実施や評価項目の見直しなど、より一層、子どもの視点に立った状況分析を的確に行うと同時に、全ての児童・生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、「書く」「話す」「発表する」などの発信型の活動に関わらせる授業を構築することが大切である。また、自分の主張が明確に伝わるような話の構成や展開を考える活動、目的に応じ、文章と図表とを結び付けて必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりする活動を各教科の授業に意図的に組み入れる、さらに児童・生徒の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習が促されるよう、自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなどの工夫・改善を積み重ねていく必要がある。